

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十六年十月二十五日 印刷  
昭和四十六年十一月一日発行 (毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通卷五三四号



No. 534

特集・はたらくうた

十一月号

# 〈朝鮮人蔘〉の効用



の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

ヒヤクは

この朝鮮人蔘の



有効成分をそっくり

カプセルにつめた

現代人の薬です

朝鮮人蔘エキス製剤

## ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社  
東京日本橋本町2-5



# 豚饅・焼売・焼餃子



大阪・なんば

TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋  
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストア

訳がありそうこれ見よがしの小半日  
ののしり疲れ反主流派のノルマ  
ここに道あり大人の狡さに通じけり  
不逞な瞳読みの深さを整える  
大雷雨大観えがく永源寺

## 中島生々庵



(生々庵主幹から路郎賞を受ける尼録之助氏)

## 一遇千載

本誌の創刊号から表紙に麗筆を賜る玉青画伯が来月外遊されるので例年より期日を切り上げて門下生の写生会が持たれ、二台のバスに分乗、予報の俄か雨など気にかげず出発したのは九月二十六日朝九時であった。

目的地は滋賀県臨濟宗大本山永源寺である。ところが現地到着の頃には29号台風と急変し雷鳴を伴うた大雨という次第。一同稍々氣勢をそがれたかにも見えたが早速身仕度を整え会館の室内からあるいは境内に佇って筆を執る。「雨には雨、風には風の大自然の息

吹きがある。これを捕えるのが南画の根本道である」日頃温情の師匠もいつになくきびしい。私は惟った。この天下の絶景である永源寺溪谷に師を囲み同志と相集るのさえないみなならぬ機縁であるのに、重く流れる白雲は低迷し、山並みの雄大さは常の日の数倍加。このようなことは再び求めんとして容易に求め難い出会いである。千載一遇とは将にこのことであろう。「花鳥諷詠」という心境とは全く別の閃きが川柳人としての私の頭の中をつきぬけた。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子进行い

(路郎)

私の句

職人の父を尊敬して継がず

吉岡美房

## 川柳塔十一月号目次

千載一遇

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

川柳塔……(同人作品)

中島生々庵選……(1)

町二と午朗

中島生々庵選……(4)

川傍柳初篇研究……(百)

尼緑之助……(2)

前田喜代人・故岡崎重義・清  
川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄  
十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……(13)

傍島静馬……(22)

近作柳樽

川村好郎選……(30)

早乙女主水之介

東野大八……(24)

秀句鑑賞……(同人吟)

浜田久米雄……(26)

はたらくうた……(同人特集)

正本水客……(27)

無鬼・晃男・弘朗・千翁・天笑・弥生・新之助

近詠

(29)

## 町二と午朗

### 尼緑之助

昭和の初期、「川柳雑誌」に福田山雨楼、松丘町二が盛に活躍、路郎先生を盛り立てていた。当時プロレタリア文学が流行し、マルクスも謳歌されていたので、川柳の世界にも当然影響を受け、新興だ、革新だと波を打っていた。(今もやはりあるようだが)

町二はそのような背景の中で、鋭い感覚で主張を展開、私達は大いに惹きつけられたものだ。句も清新に受け取っていた。

いたずらな鉄なりけり蟹煮られ  
秋は秋は光れるピストルか

町二 同

彼の尖鋭さはその後ますますエスカレートし「川柳雑誌」の進歩的ではあきたらず、遂に袂を分かつに至り、自由律川柳「手」に拠って世に問わんとした。

酔っぱらって子の父貧しい妻の怒りへ帰る  
路次にみなぎるものの匂いの三日月出ている

(町二の句「手」昭和十一年十一月より)



川柳五十三次…(十四)

富士野鞍馬…(28)

月着陸…

高鷲亜鈍…(23)

酒田清子さんを悼む…

西田柳宏子…(44)

句集「山の灯」評…

橋高薫風…(39)

きのう・きょう…

本多柳志…(45)

落語…

不二田一三夫…(47)

近況…

久米奈良子…(43)

雅号ぶっちゃけばなし…

大谷月都…(53)

初歩教室…

本田恵二朗…(50)

大萬川柳「捨て石」…

中島生々庵選…(52)

川柳家の暦…

清水白柳…(46)

柳界展望…

(薫風)…(54)

本社十月句会…

(庸佑)…(56)

各地柳壇…

(文秋)…(60)

一路集…

宮尾あいき選…(48)

編集後記…

江国幽谷選…(48)

〔ホ〕  
〔ク〕  
〔ロ〕  
〔足〕  
〔並〕  
〔記〕

工藤甲吉選…(49)

(一三夫・葉子)…(65)

座右の句

濁った声は澄んでは来ないこだま

(白柳)

私の句

打明けてくれた十字架ともに負い

八木千代

しかし、この「手」も長くは続かなかった  
ようで、いつしか町二の活動が見られなくな  
った。

その頃であったか、町二氏に会い、会食し  
たことがあったが、柔和な氏は多くは語ら  
ず、すでに川柳を放棄した、さみしさもあつた  
か味気ない別れだった。それから三十数年、  
私の脳裡に深く残っているが、消息不明だ。

さて私が書きたいことはこれだ。氏は私と  
同じ島根県人、番傘の柴田午朗氏とは同郷、  
ともに川柳への発足は同時頃と推察している  
「午朗は誤って番傘に入った」と述懐した町  
二の言葉が忘れられない。両氏の因縁のほど  
は祥かでないが、午朗の生れながらの素質は  
保守固執の番傘には、もったいない、午朗に  
とっても、川柳にとっても惜しいことだ、と  
彼は詠嘆してやまなかった。

午朗氏は今や押しも押されもせぬ番傘の重  
鎮、番傘では特異な存在、番傘のみならず、  
現柳壇のホープでもある。

詩性川柳の午朗という烙印は、いささか迷  
惑だと、当の午朗氏はいつているが、何れに  
しても、現柳壇の既成川柳への不満、そして  
新しい川柳への追求、そこに午朗氏の姿勢が  
見られる。私の述べたいことは舌たらずに終  
ったが、町二と思ひ合わせての感慨である。



中島生々庵選

大阪市 西出一栄

変化なき日々へ煙草の癖がつき

てぐすねに待たれているを知らぬ鮎

背のびして月と對話の葱坊主

生け花にもされずカンナの炎えにもえ

妹清子逝く

骨あげに夾竹桃が赤すぎる

島根県 藤井明朗

家訪えば花の中から笑顔見せ

人間の相克札束へしがみつ

言訳を知らぬ振りして妻は聞き

秋の灯に老妻と旅の話など

政界の多難野党もうろたえる

倉敷市 藤井春日

合掌の二字で結んだ無心状

老兵も黙しておれぬ社のピンチ

取るだけは取って寝返りうつと決め

停退のそれから犬さえ尾も振らず

公害がとうとうかき船陸に揚げ

富田林市 岩田美代

書き出しがパンチ効いてる催促状

もらい泣きの方の涙で葉に泣け

さとう壺にはまって蟻は呆けている

倅せな友で女でありすぎる

ようやくと持たせた花に彩がない

広島県 高橋鬼焼

思案する歩巾と他人見てくれず

さようならやっと一人になれた酒

今日の風私のうわさ乗せてくる  
ちびた靴いたわるようにそつとぬぎ  
正装の妻へすまなくビッコ引く

大阪市 正本水客

不機嫌な肩と叩いてから分り  
夫婦きり朝のあいさつがない  
きうりの値などを話題に法事済む  
満ち足りた音お茶漬けの箸をおく  
繰上げ当選爛ざなどとは言うとれず

神戸市 仲 どんたく

僕の癖九官鳥に教えられ  
ハンディーを上げるとドルは円に云い  
エコミックアニマル眠むる団地の灯  
食う為に飛んでる鳩が歌となり  
一銭の帰える日を明治待つ気持ち

京都市 松川杜的

七草もきっちり覚えて旅が好き  
秋雨が丁度よかった萩の寺  
幸せな柿だよお地藏さんに供えられ  
雨降れば雨の調べで塔の唄  
鈴虫の口にもうまい茄子まづい茄子

倉敷市 竹内翁童

遺言状だまし続けたことも詫び

GNP国土ガタガタにしてい  
流れ去るから過去の美しい  
後継者育てて勇退せまられる  
若い奴には負けぬと息を切らしてる

大阪市 福井野迷路

涼風のロマンの私語に耳かさん

味覚(三句)

久し振りかばちゃのうまさうら盆会  
夏の芋矢張り明治はうまかった  
犬に猿嫁に姑俺になまこ

時事

通貨危機亡者が右往左往する

大阪市 金井文秋

西出一栄さん句集刊行(二句)

平凡な女一代句の光

家族減って行って交際費が増える  
腹の底ここでわかった内輪もめ  
まだ若い若いとおやじ酷使され  
小説にされる女に生まれつき

青森市 工藤甲吉

死ぬことを忘れていれば保険来る  
人生はつまらないなと叱られる  
出す時は出すけちんぼで見直され

組板の鯉になつてゐる心電図  
民泊の一夜を包む虫しぐれ

高槻市 若柳潮花

あぶら蟬余生あまさず鳴きつづけ

宝塚市 傍島静馬

三味の胴たたいて寄席は派手に弾き  
草を踏む素足の底で虫が鳴き  
やまいれて道頓堀の霧を吸い  
鉢巻でその日ぐらしの汗を拭き

米子市 林瑞枝

掌中の珠一対となる式を挙げ  
旅情ふと窓の夜景に浮ぶ過去  
リュック背に驟雨に濡れて行く若さ  
川面吹く風恋人を待つ詩か  
マンネリへ句読点打つ旅支度

宇部市 平田実男

明日あるを信じた亀の歩きよう  
セールスマンこっそり他社の物を買  
草食べる山羊を羨む野菜高  
倦怠期が長くてねーと子沢山  
モデルチェンジと妻髪型を変えている

倉敷市 田垣方大

虫啼いて留守番よけい淋しなり  
とっくりを振っても妻はにらむだけ

貯めてゐる噂の主の不精髭  
漫才のような話の耳遠し

底抜けた桶ままごとの風呂になり

孝行もしたいが酒もやめられず

岡山県 浜田久米雄

胃潰瘍でないのを本人知っており  
宙釣りになつて幽霊汗をかき  
公害に堪えてコオロギ生き残り  
溝掃除疾うにすんでる長話

面影を探すピントがやっと合い

年寄りはいれぬの話からはじめ

団体の旅はがやがやがや終る

だまされた口惜しさ相談欄へ書き

立膝をして核心にふれてゆき

豊中市 戸田古方

奥の院ボクよりひどい松葉杖

珍らしい馬車 馬車馬の目がきれい

雑草の強さで生きてゆかれそう

ここ掘れワンワン土器のカケラがホラあった

沖縄の業やとそっぽむきそう

倉敷市 本田恵二朗

高野二題

奥の院ボクよりひどい松葉杖

珍らしい馬車 馬車馬の目がきれい

雑草の強さで生きてゆかれそう

ここ掘れワンワン土器のカケラがホラあった

沖縄の業やとそっぽむきそう

倉敷市 本田恵二朗

とっくりを振っても妻はにらむだけ

倉敷市 本田恵二朗

味方が多いはずだたっぷり持っている  
めっきりとポインになってた久し振り

悪口へ合槌打たねばならぬ義理

ぬかみその上手な嫁です美人です

西瓜の座老妻はしつこばかり食い

大阪市 大坂形水

大儲けした奴もいるドルシヨック

ボーナスヘシワ寄せ来そうドルシヨック

医師会が言う管健保の寮目立つ

ふと夫婦西国巡礼思い立ち

歩くこそ値うちの参道バス走る

名古屋市 吉田水車

ピチピチの魚にすれば断末魔

ガイドさんの鼻のまるさよ滞八丁

造花かとさわればホロリ落花する

駅長さんこのごろヒゲをのびしたり

甲子園突撃ラッパもちよつと入れ

大阪市 本多柳志

いんぎん無礼未払い会費請求書

一代で返せるご恩高が知れ

礼服で来て平服へ気を使い

旅中吟

フロントの謎は父娘というサイン

往きも佳し復りもたのし旅日記

大阪市 阿万万的

飛鳥路を歩く

古き寺昼の虫啼く陰があり

世に耐える姿で亀石草に伏す

山の辺の道どこまでも草匂う

静寂のたまり場そこに荒れた寺

まだ歩く道あり飛鳥は秋の色

大阪市 江城修史

美しく老いたし命ある限り

人伝てに初孫誕生聞くえにし

愛果てし男が唄う枯すすき

残り火をかきたてなさいとカンナの朱

失ないし愛かえるごと霧が這う

堺市 藤井一二三

肚の底から男を捨てた声で借り

虫の餌籠へ人間エゴも入れ

不景気の風は零細だけ荒らし

賞罰は無いが誠実語る鯊

ドルシヨックネオンも忙しのう灯り

堺市 河内天笑

大文字粋なはからい月が出ず

空っぽのビルから都会夜が明ける



杉木立いま満月を差し上げる

風鈴の音宿替えの忘れ物

コンパクトパチンと嘘をしまい込み

小松市 四方天弘実

鳥籠のせまさに馴れて恐い空

空想を誰も知らない煙草の輪

寝転んで変動相場のニュース聞き

絞められて静脈むごい針刺され

山彦の律儀へも一度声をかけ

和歌山市 垂井葵水

錆ついているのか絆未だ切れず

つまみ喰いしてエプロンの端を借る

儂さを語る夏足袋脱ぎながら

ところ天喰い山びこを太くする

午後二時の向日葵誰も寄せつけず

島根県 小砂白汀

句読点抜けた男でたよりなし

壺焼きになるとはサザエ腑におちず

あざけりを半身になってやりすごし

燃えつきた姿のままで灰になり

そと面をつくらうちは脈があり

東京都 増田次章

予定みな空白にして老妻と居る

見ないふりしながら見てる瞳が出合い

お引きとり願うキッカケだけを待ち

毎日見てる顔いつの間にか老け

話しかけ思い出せないまま別れ

倉敷市 小野克枝

同じ服同じ笑顔で友に逢い

お金見て笑う本心見てしまい

一泊の夫へひとこと念を入れ

金賞に母の瞳うるむ書道展

母が居る黙って我慢する晴着

京都市 都倉求芽

ここと云うところが針金手に負えず

少し金はいって目標高くする

去にそびれたばかりに合槌打たされる

筋道を通す勇気を金が断ち

薔蒼と老杉分譲家わびし

伊丹市 小川静観堂

亡妻の夢(一句)

燃えるものなにも残らず我れ老いぬ

露営のギターをまたかと阿鹿うるさがり

日本の歴史男だけで夜つくられ

先妻は三人もあり新婚やんや

空晴れて木の間木の間の楠若葉

岡山県 池田古心

癌手術していた医者が癌で死に

旅の恥温泉町で捨てられ

猫の仔と遊んで雨の日の老爺

死の準備したのに十年まだ死なず

栗の虫イガがあるのに喰い荒し

大阪市 橘高薫風

これが死にするかとばかり痩せている

東海林太郎の眼鏡をかけてきた女

雲波に波雲に似しはたちの日

裏窓は山下清画く屋根だ

一日は鎖一環倦怠期

大阪市 不二田一三夫

うふらも宙に舞う日をどぶで待つ

今日のドラマの序章 顔を剃る

悲劇や喜劇はあったが活劇ないわが家

寄席(二句)

砂川捨丸師(81歳) 逝く・46・10・13

六十年手垢のついた鼓 寂

古典保持 太夫・才蔵の名も消える

堺市 吉田圭井堂

株街へ包んで覗く袈裟ころも

判読でどうやらご無沙汰文らしい

おちぶれてもキツトの靴はまだ脱げず

暮し向きがばれる手帳を落して来

岡山県 直原七面山

髪梳く女の腰の豊かさ

意地が邪魔して燃え切れぬ恋

雨の日も風の日も逢い 恋棄し

束の間の逢瀬へ燃えている二人

大阪市 山川阿茶

こおろぎの一ときわ高いアリア聞く

駐車場のエンマこおろぎ轢れるな

鯛網と云うショウウに出る鯛で候

完全に近く人間味がうすれ

岸和田市 高橋操子

展示会月賦で呉れる顔ばかり

ほって置く積りの株が日に下り

たいこだけ聞いて祭の台所

倒されても本望と云う客に貸し

出雲市 尼 緑之助

軒すれすれバスはよるよる過疎の町

又雨か秋よ煎茶を濃く入れる

台風禍今年は梨を送らない

三男新築

海近く木のない庭も夢を持つ

倉敷市 水粉千翁

揃えてる靴へ自信の今日を履く  
幸せをつかむ片手は肩を抱き  
たくましく錆びてメッキになりません  
寶石を蹴っておんなの道けわし

高槻市 福田丁路

暴落の株に拘りなく昼寝  
マイカーの事故をマイカー振り向かず  
チャンスとばかり惜しみなき鼻薬

東北地方廻遊

天を衝く羽黒の杉を値ぶみする

藤井寺市 西いわを

白生地のままのお人と思ひ込み  
銀行が釣上げて来た角屋敷  
いくばくの余命を舞うか黒揚羽  
秋立つに未だ抜け切らぬ夏の風邪

倉敷市 小幡里風

家計簿の余裕レモン厚う切る  
お世辞を素直にうけて踏みはずし  
黒い影鏡を透けている不倫  
美しさ見せ老夫婦汽車の旅

出雲市 弘津柳慶  
病床の妻へ金婚式のプレゼント

酔うて帰れば病床の妻すまなかり  
人間国宝いつか変人にして終い  
左遷されて大過なくの挨拶状

大阪市 水谷竹荘

一泊の佐渡は住みよいとこでなし  
行きは夜帰りは寝てて富士をみず  
二次会の払いはもてたのがおごり  
胡瓜でもまがっているのは売れ残り

鳥取市 河村日満

増築をして(二句)

増築の一と間ご先祖さまへあげ  
昼寝するこの日を夢に五十年  
洗い髪妻の白髪も目立ちかけ  
父に似た飲み口妻に案じられ

大阪市 児島与呂志

あっさりと夫にまかせたカローラー表  
放っとけばどうにかなるさと子沢山  
ぜい竹の歩道言い訳考える  
妻の声ヒスに変わって子ら黙り

門真市 福島鉄児

慰めの言葉もなく受話器おく  
うっかりと聞いた話に巻き込まれ  
和服きて夏を涼しいものにする

ぶら下るように女は腕を組み

大阪市 木村水洞

人命が失われてからの善後策

アベックで買物に出る秋日和

不景気を膚に感じる裏長屋

たすけ合う心長屋に受けつがれ

桜井市 岩本雀踊子

ペンだこで一家五人食いつなぎ

冬ごもり蟻が夏の陽をおしめ

町内の世話好きケチな知恵をかし

素顔の女は嘘をつかぬなり

松江市 中川晃男

神話の出雲へ路郎賞抱き寄せる

作者の手離れ受賞句騒がれる

万遍なく笑顔を売ってひとりぼっち

心の傷セロテープで貼りホッチキスで止め

松江市 吉岡通児

故あってのばした髭と見てくれず

菊花展受賞停年来の趣味

交通禍手相適中せし不幸

酔い心地部屋一杯に寝そべって

倉敷市 野田素身郎

同僚の昇進を聞く秋の暮

どこがどうというではないが好きになり

問題は山積残暑まだ続き

修道院入りも考えていた後妻

大阪市 有信新之助

灰皿になって帰ったうどん鉢

沈黙に首振るだけの扇風機

焦心に電車も軋んで走りだし

面前で言う気のドアに手をかける

米子市 八木千代

濡れた手のまま乾杯へ妻も出る

ひとりの灯待つ夜ひそかな恋に似て

眼を伏せてひまわりが聞く秋の音

ドライフラワーそっと散りたい日もあろう

大阪市 天正千梢

選んだのは私愚痴をかみしめる

あやしてくるから私は笑う

偉い子を持ち母も偉くなり

理屈では分らず偶然出来上がり

松江市 小林孤呂二

ほどほどの二次会へ妻は素直なり

案じられているから奮発をする土産

戦中派の名残りさよならも挙手の礼

米中のニアミスへ政治家また慌わて

大阪市 小出智子

竹原市 森井菁居

何事もうまく行く日の虫の声  
読書よりすべなき父が哀れとも  
放してやったこおろぎらしい声で啼き  
思うことあって久しく花活けず

大阪市 河野君子

鳥取蒜山高原を旅して  
風紋となる足跡に夢を置く  
父を病院に見舞う (一句)

パントマイムで語る母なり夜の病舎  
孤立する娘へさりげなく味方する  
仕上った喪服に心弾まない

出雲市 原独仙

猫蹴って見ても溜飲下がらない  
中学の息子近頃寝押しする  
言い訳は本署でしろと無情なり  
厄日無事廢家に柿たわわ

東大阪市 宮西弥生

乗鞍山頂へ行く (二句)

ようこそとアルプスみんなベール脱ぎ  
道開くを信じて山頂へ急ぐ足  
宝石見る女他人の目忘れてる  
切られても花そのままでの色で咲き

コーラスの声に不向きなくつわ虫  
神様の創意はさすが栗のいが  
落ち鮎の油断へ仕掛けが待っていた  
カンナ燃ゆ皮肉よ恋に破れた日

八尾市 高杉鬼遊

叙位叙勲遺骨を抱いた日がよぎり  
小さなごみだからきっちり捨てて  
時計ふってみるお前も疲れたか  
老杉はなお天を指し孤を守る

鳥根県 堀江正朗

あの日から空の青さも知らず生き  
性かなし臥しても母と妻として  
負けぬ氣を覗かす妻に負けている  
痛さより佗しさ額をぶっつけて

松江市 恒松町紅

泰平の夢をドルから驚かされ  
仇討ちのようにゴキブリ狙われる  
仏壇に亡妻が居るから灯を入れる  
晚酌の味から秋がしのびより

倉敷市 松下梁水

落目とはこんな祠も拝まされ  
毒舌でたがいの無事を祝い合い



演出という賞讃が派手過ぎる

もう俺に入り込む余地のない故郷

岡山県 大森 娛句 楽

円相場聖徳太子ソッポ向き

犬猿がシャンシャンシャンと手を鳴らし

口先に騙されぬだけの知恵が要り

百舌啼いて陽射しも秋へ衰える

倉吉市 奥 谷 弘 朗

雑草で終る定年肩がおち

仲直りした沈黙へ雨の音

お帰りと迎える妻が居て足りる

人生を大事にしたい持ち時間

愛媛県 渡 辺 曉 童

発つ朝の宿の浴衣のみじめとも

すごみを欠いだ夏の遠吠え

年金余生(二句)

晴読も雨読も板について来た

四君子のごと年金で生き伸びる

大阪市 中 川 滋 雀

朝詣り心の棘がひとつ抜け

友達の間まで別れた淡い悔い

雑念に負けまい読経の声をあげ

気にかけて呉れた便りを読み返し

愛媛県 村 上 旭 童

どっち向いても赤潮だった魚の死

減反へついに不作の秋がくる

不意うちの秋恐しや曼珠沙華

おっさんここで飲みなおす気の肩をくみ

宇部市 石 川 侃 流 洞

葉ずれにもすぐ目が覚める老を知り

病院で飼われ兎の不倖せ

孤児たちの母のまぼろし保姆ひとり

珍品が奥にあります土産店

堺市 高 橋 千 万 子

初恋の秘密に指紋ついていた

子を産まず悔を残した共稼ぎ

バックミラーダンプかみつきそうに見え

バイトして商売のコツ一寸知る

姫路市 村 上 春 巳

新聞屋駆け抜けて今朝の道となる

もう少し化粧しろとも言いかねて

理髪屋にご無沙汰でんなど嫌味聞く

公害と言う煙突の派手な色

大阪市 吉 岡 美 房

秋を画く子の画用紙に黄と赤と

連想の拡がるままに彼岸花

にせものの価値を造花は主張する  
理性見つめて向い合う裸像

平田市 久家代仕男

磯更けて砂利もてあそぶ夜光虫

理髪屋の鏡に泳ぐ熱帯魚

妾宅で育ち本家に迎えられ

過疎わびし芒の土手の停留所

大阪市 西川誓二

### 恋路が浜（一句）

藤村の诗情しのべば波寄せる

孫の名の提灯もある地藏盆

筆不精を老母の便りに叱られる

母子家庭 親を励ます子に育ち

芦屋市 丸川初甫

中国の笛聞えそう渡月橋

栄転も左遷も素直に宮仕え

波紋にくだけてささやくように月

信頼せよとばかりに銀行のネオン

奈良市 宮口笛生

最高の残暑へ犬の舌長い

休耕田もったいなくも草の丈

わびしさの中に九月の月まるい

定期便のように都会の救急車

守口市 羽原静歩

握れば握るほど砂のあわれ

移り行く秋へひたひた水すまし

ドルシヨックどこ吹く風の縄のれん

落日に声なし砂丘を降りて来る

和歌山市 野村太茂津

先祖にも詣らず古墳観て廻り

縄文の土器を手にした血がかよう

縄文を印した人の指想い

現し身を古墳の中で思うこと

八尾市 香川酔々

夕焼けが膳のやっこを染めに来る

ピエロから素顔に戻る大ジョッキ

名物を聞いて仲居の口ほぐれ

秋の音聞きたし池に石を投げ

八尾市 飯田一治

住職と語る茶粥の大和古寺

どちらへも馬を合わして酌ぐ仲居

困った時にこまったような知恵が出る

肩まで出して窓口に教えられ

大阪市 室谷徹舟

石橋を叩いて結局先きに溜め

蔭の咳それから話進まない

人の幸素直に喜ぶ幸を知る  
やけくそで来たキャバレーで口説かれる

姫路市 隠岐不酔

猫でさえ三日は恩を覚えてる  
久しぶり訪えば又かと先越され

笑顔すりゃ儲けたんやろとおごらす気  
誰に似たうちの胡瓜は皆曲り

小松市 馬場魚山

完全な無職となつて知る暑さ  
送る日の秒針無情とも思え

着ぶくれるわけにも行かぬ夏の風邪  
共稼ぎの子も共稼ぎカーを買い

尼崎市 高津徹也

風船のごとき名誉に甘んじる  
辛抱がもう出来かねた咳ばらい

腰掛けたソファ―待機の刻を聞く  
その顔が妙にゆがんだ虚をつかれ

大阪市 宮地双楽

往復の切符もてない人生譜  
死ねばみな元素にかえるだけかしら

聖賢の古智見習つて夢生かし  
星一つ見えぬ夜空にふむ百度

松江市 柳楽鶴丸

夫婦合唱三人目を産むと決め  
夢楽しヌーデリストでした見合い  
歳時記の中へ痴漢も入れておこ  
一億の中に雄も雌もいる

兵庫県 遠山可住

一代目は野武士次から英紳士  
GNP二位の株価がうろたえる  
金の無いところをチャンスが素通りし

信州での戦友会

信州の夏太陽がありあまり

笠岡市 出原真奇

母と来た砂への足跡撮っておき  
旅好きの嫁で姑と馬が合い

お荷物になるのと病妻ちとすねる  
ちよっぴりと顔が売れたで髭を立て

兵庫県 河原みのる

お見合いって西瓜選るよな運不運  
来年を信じる菊の苗育て

うとましきものとして稲を刈る  
篠山線廃止決定

刀折れ反対幕の破れ下がり

諫早市 原田明春

代筆だから秘密は云えませず

出稼ぎへ便りが来なくなつて採め  
コンベアが俺等の仕事みんな取り  
ダイヤなどまだ程遠い共稼ぎ

倉敷市

谷井扇水

鳥取県 清水一保  
庭の木を障子に写す月と寝る  
子が果立ち運動会に遠く住み  
豊作を氏神何と思し召す

辻褄を合わせる言葉尻がボケ

大阪市 福井多蘭子

喋るのが下手な人にも役がつき

決めた人無くてカメラへ固くなる

腕章をつけたら平気で雨に濡れ

東大阪市

斎藤三十四

油虫一匹何事ならん台所

鳥取県 鈴木村颯子

金で済むことを死ぬの家出のと

寝るだけの家で月給皆とられ

戦友会元班長で世話を焼き

奈良県 石倉旅風

新宮市 大矢十郎

貧相な顔を鏡が見せてくれ

片隅のコーヒー男の罨を読み

残暑なお厳し充電したい日よ

集金に來たとも知らぬ自動ドア

大阪市 今西章雅

富田林市

木村弥栄子

美しく老いるデザイン考える

出勤の妻に女の見える朝

細くとも生きる限りをともさねば

不燃焼句焼直しする朝の目で

大阪市 河井庸佑

主婦業に専念してる夏休み  
籠の鳥何を思ふかきよも暮れ

せせらぎが話しかけてるひとり旅

松江市 岡崎 祥月

一本の道前向きに進む道

ひとり旅妻がいたらとふと思う

我を通す一歩手前で手綱しめ

大阪市 本庄 金三

金策がついて喉の乾きしる

大砂丘僕の足型置いて来る

お土産に貰うた孫の手肩たたき

岸和田市 福浦 勝晴

条件に手の込んでいる手切れ金

猿回しおのれの猿を喝采す

喋るだけ喋って営業案内書

笠岡市 木山 遠二

持っていないから取る方が泣いて居る

また来年と敬老の日が暮れて行く

漢方の世話にもなってみる持病

大阪市 宮尾 あいき

お見送り朝の電話が邪魔をする

娘入院

病院へトクホンはったままでゆく

手術室へゆく娘覚悟の笑顔みせ

高槻市 山田 季賛

小銭入れ今日の縮図をふくらませ

公害の世に蠅 蠅なりに生きのびる

新カナを孫の注意で改める

今治市 越智 一水

月清く清く澄むから秋あわれ

石の上に降る雨を見て思うこと

安らぎの坐につき生き抜く力わく

貝塚市 野坂 つき子

妥協ぐせついて本心ぼけてくる

理想とはおよそ縁ない人に惚れ

灯を消して女一人の夢を見る

西宮市 島居 百酒

重役を呼び捨て辞めたのが集い

ポイントに触れて話が脱線し

岐阜・浜松・箱根旅行

切角の鵜飼ゴルフへ宵寝をし

東大阪市 竹中 肖二

うなずいて又も眠りに落ちる父

としよりの日もいそがしい老夫婦

越境の竹裏庭で良く繁り

東大阪市 竹中 綾女



八月二日 九十一才の夫の父逝く

やがて名を呼べど答えぬ父となり

これ程も瘦せられるものか父の逝く

炎天の野辺の送りは暑かりし

兵庫県 大江 秋月

ローカル駅村の話題を上げて来る

新築の柱の匂いかいで寝る

朝は盆栽夕は犬の世話に暮れ

笠岡市 松本 忠三

食堂のにおいエスカレーターまでとどき

これきりのマッチへ風を意識する

入賞の友へ風呂敷貸してやり

大阪府 飛田 好一

公害を知って来たのかつばめの子

義理だけの顔を連ねるお葬式

断酒して

後悔は酒に酔しれおりし頃

鳥取県 森田 布堂

日の丸の旗もまばらに立つ自由

禿げたのが四五人旅で恥を捨て

標本に無邪鬼な顔が針を刺し

鳥取県 谷 無閑

兎に角も縁起と音痴唄わされ

じれったい恋だと先輩のアドバイス

無人駅陛下迎えし日もありき

八代市 永松 道雄

若い芽に押され古さが伸びなやみ

明暗の一夜がしらむ外科病棟

寝台据えて手ぜまな部屋住い

岡山県 出原 敬一

形見分け本家は簞笥だけ残り

分校の弁当まつ茸栗ご飯

商売繁盛浮気の虫がなきでした

奈良県 草深 醉升

俄雨ミニの娘がうらやまし

は見よとばかりかわしてトンボ逃げ

墓掃除社長も今日は帯持ち

善通寺市 岩田 ひさお

立関に蜂の巣もあり楚々と住む

念入りに金をかぞえて老いを言う

ははのこと想えば虫の音が途絶え

堺市 伏見 茂美

ままならぬ恋も見ている水銀燈

暇できてパートさしてと嫁の知恵

竹生島巡拝

乱世のお市を想う竹生島

鹿児島市

土岐トク子

造反も母の涙でけりがつき

手の掌をかえし息子の毛語録

敬老はカゴシマオゴジヨに今も在り

島根県

中島英子

大学に居た娘と見えぬ角かくし

ほほ笑むと模様替える顔の皺

過疎の里人呼ぶように虫が鳴く

堺市

吉岡青香

鄭重な電話はだかとさとられず

欠航と決めたら風も止んでいた

心にもないことが言えうけている

島根県

景山綾美

招かざる客台風のご狼籍

物言わぬ方が疲れたと言う見合い

高らかに栄光の日の排気音

★

栗ご飯囲炉裏の部屋で食べてよし

栗ご飯自慢の母をひきあわせ

西尾 栞

栗ご飯嫁かずの叔母のよう動き

栗ご飯嫂の在所をたずねられ

栗ご飯遠くで発破の音がする

菊沢小松園

限界に來たを女もうすうすは悟り

一身上の弁明盃さすが伏せたまま

かただけ女ごころは抵抗し

美しい嘘へ積木のくずれ落つ

霊柩車バンクしたまま家の前

若本多久志

敬老の日翌鏢と社長室

辞書にさえ古稀の稀の字は消えて無し

磨崖仏刻んだ人が生きてる眼

エスカレーターコティが匂う下に立ち

亡き人を偲ぶせせらぎ高瀬川

北川春果

亡父五十回忌法要帰郷(四六・九)

五十回忌せめて川柳忌に合わせ

墓石は揺がず苔もむしていず

ふるさとの道の狭さも古さなり

高速船大阪資本のしぶき上げ

高速船土産にしたい風を切り

# 川傍柳 初篇研究

(百)

前田喜代人 川端柳風  
 岡崎重義 高須啞三味  
 清博美丸 十府  
 藤井和雄 岡田甫

607 はへぬきの階子の側で駕イ／＼

眠 狐

川端「はへぬきの階子」は火の見櫓のこ  
 と。既出「のぼるべからずへ駕かきもたれ  
 てる」の類句。火の見櫓のそばで、吉原通  
 いの客を待っている駕かきの様子。

高須「当時の火の見櫓は大略十町に一カ所  
 建ててあったので、たいてい駕屋はそこら  
 で客待ちをした。」

半鐘の下で四手にひらり乗り

傍 47

清「火の見櫓と四ツ手駕、類句多し。  
 丸・岡田」賛。

608 きざな事御経のくずがたまる也

水 砥

川端「不詳。」

高須「後家さんへ通う坊主の表看板の「お  
 経」は、特に近所へも聞こえるように声高  
 々とよまれる。仏壇には線香の灰がたま  
 る。だが当の後家さんは仏壇の掃除より、  
 通って下さる坊さんへのおもてなしが忙が  
 しくて、それが「きざな事」なのである。」

後家をする図には持仏をあいしら

熊 35

前田「御経のくず」がわからない。後家  
 でなく囲われとの関係であろうか。

清「御経のくず」は、御経の本が何冊も  
 何冊もたまるといふ意味だと思う。詠まれ  
 ているのは後家で高須説と同じだが、「キ  
 ザ」については、違った考え方をしてい

る。この後家は悟り切った顔つきで御経の  
 本を何冊も買い、亡き夫の供養ばかりして  
 いる。しかし、作者は、後家の本心を喝破  
 して「眠られぬ夜もあるはずだ」だから悟  
 り切ったような顔をせずに、人間本来の煩

悩の中に生きたらどうかと問いかけてい

るのではないか。作者はこの不自然な生活、  
 つまり高須説とは反対に、煩惱をぬぐい去  
 った顔つきの生活を「キザ」だといってい

るのだと思う。

藤井「きざな事御経のくずが金をためる  
 也」ではなかるうか。すなわち、完全でな

りくずのようなお経を仏前にもったいら

し

くあげて金をためやがった。半人前の坊主

か、もぐり坊主への悪口。彼等の一人前面

をきざとののしったものではあるまいか。し

かし、この解自信なし。

丸「お経のくず」は清説に似て、読みも  
 せぬお経本。それをこれ見よがしに仏前に  
 そろえて、亡夫の後世を弔うごとく見せか  
 けて「きざなこと」内証は……というので  
 はあるまいか。自信なし。

岡田「みなさん上五の「きざな事」のキザ  
 を度外視しているか、あるいは現代風に解  
 釈しているが、この当時のキザは漢字で書  
 くこと「気障」すなわち気にされる、気にか  
 かる意味です。（それが転じて、現代では  
 どうも気にかかる度外視できぬ厭味たっぷ  
 りな奴を「キザな野郎だ」などというよう  
 になった。）さて自解は、親であれ子であ  
 れ、また夫であれ、それら肉身の人の亡く  
 なったあと、日がたつにつれて多忙にまぎ  
 れて、仏前に線香を供えて読経するのもお  
 ろそかになり勝ち。それを仏にすまないと

気にかかるのだが、ついそのわずかの時間がさけないでしまふ。すなわち片付けねばならぬ些細な読経の時間……それがたまってしまったのを「お経の屑」と表現したのが句の山なのだろうが、いささか飛躍すぎた表現法で皆さんを迷わしたようです。とにかく仏前にお経を捧げるのが怠りです。どうも氣にかかる、という句であると思っています。

609 素見の喰残しに四ツ手ハすべり

眠 狐

高須 素見は「すけん」と読み、素見物または素見客の略されたもので、すでに幾度か出たと思うが、別に登楼するわけでもなく一軒々々丹念にのぞき歩いて廊内を賑わしたもので、ひやかしと呼ばれ（この言葉は吉原の近くの山谷付近に紙をすく家が沢山あり、その職人等がすきかえしの紙のたねを水に漬しておき、それがふやけるまで廊中の賑わいを見物して歩いたことから出たという）素見が七分買う奴が三分なり 天三鶴2で、本当の遊客よりずっと多かった。そして、

吉原の邪魔は西瓜を買って食い 安七松1

一六五

と、西瓜だの

二、三本焼いてくんなど素見物 安七松5  
のように、唐モロコシなどを買って食べ  
た。それで主題句はその「食べから」に四

手駕の駕カキが足をとられてすべったという句だが

駕かきにつかれて素見舌を出し 明四宵3

今の駕もう帰るはと素見言ひ 一一・21  
の如く、素見そのものはあまり駕には乗らなかった。  
前田 賛。よくすべるのは西瓜の皮である  
う。

丸 賛。

岡田 同。但し礎稿の末尾は取られた方が  
よろし。駕籠に乗る金があれば、吉原東西  
の河岸にあった百文女郎が買えたのだから  
素見は全然駕籠などに乗らず往復ともテク  
シーなり。  
610 百持って当らぬ方へ這入る也

一 甫

高須 「評釈」では「百棧敷、ゆっくり見  
物ができる」と柳雨翁が言い、「大辞典」  
でも「入りの少ない百棧敷へ」と解いてい  
るが「当らぬ方」とはどういうことか。

百ずつ持つて押掛の来る棧敷 寛一・43  
の句があるので「持つて」はわかるが「当  
たらぬ」がわからぬ。あるいは「風のあた  
らぬ」か。

前田 「当たる」は大入りを意味するもの  
で、「当たらぬ」は入りのすくない意であ  
る。したがって柳雨翁説に賛成できる。

岡崎 前田説、賛。当たらぬ興行は百棧敷  
も当然入りがすくない。ゆっくり見物でき  
るわけである。

清 同。当たった興行では棧敷が混んでく  
ると、向棧敷まで茶屋掛かりの客が割りこ  
むことになる。そこで

百棧敷承知々々と追いだされ 九・14

ということになる。当たらぬ興行の方は  
百棧敷あぐらをかいて憎まれる 一六・2  
ということもなく、ゆうゆうと芝居見物が  
できる。

藤井 前田説に賛。当たるとは川柳では芝  
居のことが多い。従って「当たらぬ芝居の  
方へ」で、了解できる。

川端 同。当たった芝居は、  
百ほども追っ立てられる棧敷なり 一五・42  
百出して今をも知れぬ棧敷なり 二二・23  
となるから、出し物にこだわっていないと  
ころをみると暇つぶしの芝居見物か。

丸 諸説、賛。

岡田 前田説、ご明解。（百棧敷は芝居小  
屋の二階正面の上等席の後部。いわゆるツ  
ンボ棧敷の類だが、上等席に客が来ないう  
ちは、そこに入り込むことが黙許されてい  
た。）

西尾 葉著

句集「水鶏笛」

送料共 六五〇円

「旅人」以後の

# 麻生路郎作品

三十四年十一月号

13

短詩文学作品展で橋高薫風子氏が買った色紙

苦沙弥先生そっくりと言う父になり

大阪通信病院川柳会「役所、独身」

食事していて役所返事せず

泣いてくれる人もないさと山登り

南海電鉄川柳会「週末」

ウィークエンドあっちで仕事して来る気

三十四年十二月号

南海電鉄川柳会「学割」

学割曰くこのポストンも借物や

学割はそこも夜汽車で過ぎました

大阪通信病院川柳会「土性骨」

ケチだとは言われず土性骨にされ

三十五年一月号

不朽洞句帖

賀状は出しませんよと歳末別れたり

玄関で失礼をするお元日

放送もかけっ放しの三ヶ日

生み落されて七十余年をウロチョロす

灰皿へママのタバコのけむがたち

奥さんの株があたった湯のたより

ゴルフに行きましたと奥さんに云わせ

腰かけで飲んでる寛美見つけれ

下宿でくすぶりデモを楽しめり

怒っても手ごたえのない妻で生き

新春爐辺談義に発表

割切れば太陽さえもオレのもの

南海電鉄川柳会「入場券」

見送りの母が入場券落し

入場券車窓へまでは遠慮する

(傍島静馬)



## 月着陸

高 鷲 亜 鈍

月着陸それでも地球は廻ってる  
白銀色は昔も今も空の月  
陣痛は生みの悩みの素晴らしさ  
断絶と拒絶に血の川流れる  
詩を重ね月面に重ねて光る秋 実る秋  
虚無感に読経三昧など無用

現実に戻れば闇にとり巻かれ  
意識下の深層にある影の僕ならぬ僕  
セックスが呆けてきている意味ない夜  
大きく高く大きく深き神は一体  
死もじせぬ妻子の利益にならぬ老盲  
晩酌の資格は零と極めつける  
コマーシャルコーヒーと酒はいけません  
貧乏レベルアップの冷蔵庫  
首抜けぬままのたうち廻る蛇  
目明き故に妻いとしくぞ思ふ  
ボーリング首の重さへ指をかけ  
鳴動に耳すまして其前夜

斬りすて斬りすて味方はばくだけ  
僕だけ僕の影だけ延びたり折れたり  
白日夢友遠方より来る  
庶民のひとり按摩だけはごめん  
行水のたらいがせまい脚を出す  
失明を啜う女と泣く女  
納棺には先妻も泣くだろうか  
了解がとれば女と女手を握り  
無職とは業腹著述業と書いといて  
好きなれば世話のひとつもしたくなり  
青写真にはばくにはないさ喰って眠る  
お礼してお詫び願いをたててから一発

## 西出一栄句集・川柳塔社女性第一号句集！



麻生葭乃先生・監修

ねっくれす

送料共 六百元

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇 川柳塔社

西出一栄さんの句集が出ました。一栄さんは故白柳さんに手引きをされて川柳をはじめ十八年の柳歴があります。ご夫君もかつては川柳を作っておられました。が、ご自分には家業に打ちこみ、一栄さんに川柳を専念させる夫婦愛は有名な話です。

「おおらかな句を作る人」とは葭乃先生の批評です。

# 早乙女主水之介

## 東野大八

役者道楽のそば屋のオーさまが、おい大き  
まちよいときてくれ、と電話がかかってきた  
「急用なんだ、向えのタクシーが一時間した  
らお前さんとこへ着く。夏の雨降る夜のこと  
仕様がねえな、いま何時だと思う、とぶつ  
ぶついいながらも着替えにかかった。このオ  
ーさまというのは、岐阜市でもトップの、麵  
類製造卸で、柳ヶ瀬などに三軒の直売所を持  
っている。いっくももので、自分のために世  
間が存在すると考えているへそ曲り、私より  
三つ上。もつ二十年この方のつきあいだ。  
ブー、ブー、おやもうきたんですか、オー  
さまのおよびで今からなら、今夜はお泊り—  
そのつもりでいますよ、とカミさんがいう。  
出してみると前後羽根の生えた超大型車が、  
雨をうけてピカピカ光っていて、みるからに  
豪勢。まぎれもなく自家用車で、中年のリユ  
ウとしたネクタイ背広の運転手は白手袋でい

る。それが雨脚の中もおいといなくさつと出  
てサツとあける。一人では勿体ないような朱  
色のソファァーみたいなどこへでんと腰を下ろ  
すと、まるでほかあアメリカ駐日大使みたい  
だ、と口走ってしまった。運転手がバックミ  
ラーのなかでニタリとする。

（鹿地亘はこうして拉致されたんだ）

と妙なことをフイツと考えると、鼻先からコ  
ルトの銃口でも出てきそうだ。そこで気安め  
に一言。

「よく、うちがわかったネ」

「ハッ、お迎えを頼まれた社長様が、十分  
もかかって詳細なる地図を認められましたの  
で……ハイツ」

妙にしゃちこぼってる。

「あんた、岐阜あたりの人じゃあないな」

「ハイツ、東京であります」

「東京から誰を乗せてきたの？」

「ハッ、市川右太衛門先生です。ご夫妻で  
いらしてます」

なあーんだ、そうかと思った。

しばらくぐぶさたしていても役者道楽はま  
だ愈らぬとみえる。初手、木暮実千代、月形  
竜之介、片岡千恵蔵、そしてこんどは市川右  
太衛門ときた。息子の結婚式に、右手へ岐阜  
市長、左手に右太衛門さんが坐っていたのを  
思い出したが、右太ビィキはどうもそれから  
らしい。若いころ、マキノ映画に凝って岐阜  
マキノ党を作って、映画の雑誌までこさえて  
悦に入っていたオーさまだが、まさにスズメ  
百まで、入れかわり立ちかわりの役者道楽。  
ロケにきた馬の骨でも一流料亭に呼んでの大  
尽騒ぎに私もアキれて、いくら中華そばで儲  
かるか知らんが、役者狂いはよせ、とことあ  
るごとにおいさめ申すのだが、年増の大奥女  
中みたいに根っからその病氣は改まらない。

「困ったそばや大尽だ」

としまいにサジをなげ居留守を使ってしき  
りに逃げのテを打つ私だったが、久しぶりに  
とうとうつかまってしまったのだ。

やがて新幹線なみの高級車で、私は長良川  
のとあるA級旅館の玄関に下りたった。

「やあ、きたきた」

座敷の中は杯盤狼藉である。五十畳敷の大  
広間の正面にいろのが、大兵肥満の美丈夫、  
いわずと知れた右太衛門丈。その横のずんぐ

り婆さんは右太衛門の奥さん。そのまた横に三遊亭歌奴みたいな。美女が一人、オーさまの横に艶然と座っている、誰かわからぬ。

私の紹介が終って、美女の横にできている私の席へ取ると、たちまちコップ酒がきた「さて、これで揃いましたので、連判状を……」

とオーさまがいう。三宝にのって金しゅうの豪華な一巻が現れたので、美人にひろげて貰ったら、三日月党連判状と書いてある。

「右太衛門さんのオハコである旗本退屈男の早乙女主水之介の表看板、向うキズの三日月からとっての三日月党というわけ。わしは今日から岐阜城代になった」

とオーさまは、酒で真赤になった鼻をでなで私にいう。まま、どうぞいっばい、という声に前をみると、その向うキズのお殿様が自らのご出馬である。辱けない、と遠慮なくうけると、おばあちゃんまで横にいる。

そんなわけで、居合せた地元芸妓五人のやつぎ早やの、かけつけ三バイもあってやがて私も、先客連の酔いの水準にまでせり上ることができた。歌奴みたいなのは名刺をみると興津要早大教授。「落語」という本を書いた人物でへエーと愕く。連判状には、稲垣浩、五所平之助、落語家が多くて小さんを筆頭に馬之助、円楽、円鏡、柳朝、金馬、夢楽、三平、猫八と目白押し。三日月党の結成は、興

津先生と柳家小さん師匠に馬之助ニイさんが発起人だそう。右太衛門ご夫妻は、みた眼とは逆にひどく庶民的で、気さくな話好きの老夫婦といった感じ。みなさまのおかげでこのような会ができ、江戸どころか岐阜の城下町まで、三日月党に加担する方が出現されましてと如才がない。

主水之介老夫妻が外交辞令のあと消えていったので、やれやれ酒の味がでてきたと、やおら隣組の美人の方へ向きなおり、名前をきくと大映スターの阿井美千子だという。

「ホウあなたが阿井さんね、ボカア雷蔵さんの眠狂四郎に、貴女の奥女中がゴーカンされることを覚えていますよ、名演技だ」あら光栄ですわ、とそこは人気稼業、そのときの奥女中そっくりの色っぽい眼つきでついでくれる。

こういうことから、この忙しいのに右太衛門後援会でもある岐阜三日月党という本の製作を命じられたことだが、その編集の最中に右太さんご夫妻の愛息北大路欣也が名古屋の御園座へきたのでインタビュールのおまけもつく。「なよたけ」の公演である。

「うちのおやじ頭が古くてかなわん。もっともおれのお師匠でもあるので扱いがむつかしいところもある」

と彼はときどき話を。彼と約束の場所へ、真赤な半袖に、トンボめがねをかけたフ

ーテン風がきたので、よくよくみたら当の欣也くんだったのには愕いたが、私のみてる前でサントリー角びんをコロリと独りで空っぽにしたのにも愕いた。

市川右太衛門は、でっかい顔と大きな眼玉そして声までが五十畳敷にはねかえるほどである。こんな役者はおう日本には出てこないだろう。屋敷は本所割下水、直参旗本千二百石、劔は諸羽一刀流の正眼くずし。高島屋別製の一つ七十万円もする衣しうをとつかえ引きかえ着て出る。この退屈男が、なんと戦前のスクリーンから数えて三十三本も撮ったのだそうである。

退屈男は、自分の人生をその身分故に退屈し、おしやれと酒の中で、悪い奴に挑戦すること生きていく。この単純で通俗そのもののヒロイズムに、三十三本のフィルムで庶民がついてきていたということは一体なんだろうと、私はその当座想ったことである。過去への郷愁は若さを托した衰歎につながる故にひとしおだが、そのそばく人間性は、川柳にも通じていそうである。向う傷の退屈のお殿様は、川柳の風の中でもさっそうとカッコボロしていく。その道にお殿様の息子がトンボ眼鏡で赤いシャツをきて歩いてる。この風景もまた今どきの川柳にも、ムリからぬ成り行として、ごく自然に、私には受けとれてくるのである。

同人吟

## 秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

### 髪洗う男の線は絵にならず

傍島 静馬

なる程昔から男が髪を洗っている絵は見受けられなかった。男が髪を洗う時間は大体において短かい。石鹸をつけて両手でがさがさとかき回し水をかぶればお仕舞いである。首筋に肩に胸にどこを見ても色気がないのだから絵にするどころか振り向かれもしない。その点女の髪洗いは情緒たっぷりで一瞥も二瞥も与えたくなり絵にもなる。

### 宝くじ本気で望みもちはじめ

本多 柳志

作者には失礼に当ることになるがこんな気持ちを持つ人もかなり居ることだろう。それはもち論一攫千金の夢である。金がほしい金が必要といういらいらした気持ちが昂じてく

ると毎月くじを買うようになる。買わなければ当らない。買っておけばいつかは当るのだ。いや当ってほしい。人間の欲はどこにでもころがっている。

### 冗談にとまどっている未亡人

直原 七面山

七面山張りの句である。冗談をいう方はそれ程本気ではなくまあからかってやろう位に飛ばした冗談であっても、これを受ける未亡人の側にして見ればある程度本気にならざるを得ない。未亡人の立場、日々の生活にひけ目を感じているとなればおいそれと受け答えができるものではあるまい。返事に困りとまどう未亡人の可憐さがうかがわれる。

### 鳴かず飛ばず借金だけが無い取柄

今西 章雅

平凡で地味な生活をつづけている人の自嘲の句である。ぱりぱりやって見てもよいがやればやるだけの費用が要るし借金もできて来る。借金位を気にしては事業家にはなれないことだろうがこちらにはそんな元氣もなければ野心もない。平々凡々に一日を過ごしておればよい——この性格に甘んじている自分なのだ。

ゲンコツで泣いたあの日がめぐり来る

小川 静観堂

終戦の日なんべんもやって来た。八月十五日が近づくとあの時の思い出がどうしても浮かんて来る。これを毎年くり返しているのに何年経っても拭い去れない苦々しい記憶である。骨の髄までに浸みこんだ記憶はおそろく一生滯つづくことであろう。

### 老いて子に従う昼寝させられる

飯田 一治

昼寝をしておればまずもって無難である。汗もかかねば日本脳炎にもならない。ましてこの頃のこと交通事故にも遭わないだろう。子のすすめでする昼寝まことにありがたく結構なことではあるものの年寄りには年寄りとしての考えも少々あるのだが若い者に抵抗しなくても始まらない。ここが年寄りのあきらめどころだと悟れば家内は安全である。

## 社 告

正本水客氏が今月から「秀句鑑賞」の執筆陣に加わりました。

川柳塔社

近作柳橋

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

鈴虫を貰ってもらう茄子を切る

里小路

心をこめた道具を持たせて娘を嫁入らせる親の心境と同じであろう。それが小さな緑の虫であり、一片の茄子の紫であろうとも。切るの二字が句を引きしめている。秋の夜のよう。

この夫へ生きねばならぬ注射打つ

堀江芳子

自分の命が惜しいのではない。不自由な夫のために生きていて上げねばと思う、長い闘病のために注射を打つ場所もなくなつて了つた腕を眺めながら。切実な妻の心である。

1寸は着ても上位に遠い妻

阪上十止庵

大柄で気のやさしい奥さんの人柄がしのばれて、ご夫婦の和やかな生活振りも眼に浮かぶ。

平行線きびしいものをうちに秘め

榎原秀子

マル生運動とかで国鉄当局と国労とが激しく対決しているが、労資という二本の線は相交わって傷つけあうものでなく、鉄路のように両立して仕事をして行くべきものだと思はう。だが互いに馴れ合いになつてはいけな

壁紙の両はし持ったまげんか

樫村ふみよ

何でもない言葉の端からのけんか、両端もったままの情景から今にもプツと吹き出してしまふような雰囲気も感じられて楽しい。

蓮の花ひとひらゆらりと鯉の背

高杉千歩

花ひとひらと鯉の背と、日本画をみるような静けさ。平板になり易い句題をゆらりと一語で美事に流動感を盛り上げています。

心では和解だまってビル注ぐ

山形春海

新しい発見という訳ではないが、ほのぼのとした心の移りが捨てがたい。

向日葵の自信 灼熱に立ち向かい

増田竹馬

すべてを焼きつくすような太陽へ真直ぐ顔を向ける大輪の花の力強さ、自信といきつた擬人法も面白い。

墨流すように宍道湖たそがれる

東原稲子

夕陽の落ちる明るさを追うように一方から夕闇が湖の表面を包んでくる、墨を流すという古い言葉を持ってきて、生きているたそがれを表現した手腕を買いたい。

この星の下で幸福掴めよう

垂井千寿子

現代の若者達の多くは自己主張だけを強く押し出してその実ところの奥で満ち足りないものを感じているのではないだろうか。このとげとげしい星の下で本当の自分を掴める人は幸せである。

三人の子それぞれに車で来

松高秀峰

私も四人の男の子のうち三人が車を持っているので、それぞれの中五に句主の気持が出てくるのがよく分る。子供の成長と車の便利さを喜ぶ反面、事故の心配がどこかに付きまとう。

本物の恋ゆえ素手でつかまえる

高杉力

なり振りがまわらず恋しい相手に体当たりしてゆく、たとえ掴んだ指がバラバラになろうとも。素手でという三字が句を生かしている。ただ上九本物の恋ゆえと説明してしまわない表現が欲しい。

ノースリーブすでに天下の秋を知る

坂本安代

天下の秋を知るといふ大時代的な語に対して、ノースリーブと肩透かしを食わしたあたり爽やかな句である。

★雑詠のご投句には、なるべく本社の柳箋をご使用ください。

# 川柳五十三次 (十四)

## 富士野鞍馬

### 24 金谷

金谷は、島田から大井川を渡って一里（三・九キロ）遠江の国になる。

一里塚島田金谷に一つづつ風松（二二・二九）

「越すに越されぬ大井川」を渡れば、誰もほっとした話であろう。

蓮台にのりしはけつく地獄にて

おりたところがほんの極楽

と、一九も戯作している。川柳もまた、

島田金谷はきん玉ののびちぢみ

雪友（二二・三二）

股倉の首がぬけると金谷なり松葉（二二・三三）

またぐらの首がとれると遠江五島（二二・三三）

蓮台を下りて汗かく九十川（二二・三七）

れんだいで花よめおくる金谷宿

（安六松二）

と作っている。渡ってしまえば、

大降りに金谷泊りは高枕 通雅（二二・一六）

ということになる。

しかし下り旅客は、川留になれば、

退屈さ川を越す夢ばかり見る

夢中（二二・四〇）

川留に基盤の外はつばをかり

（四・九）

と、対岸の島田と同じ状態で、

金谷から曰挽唄を覚えて来

（初二八）

という人もあったであろう。また、

川留に無間の鐘へさそはれる（二二・三五）

という句がある。無間の鐘というのは、

金谷だち無間へ廻り昼になり静寿（二二・二三）

金谷立無間で昼の飯を食い静寿（二二・二三）

梅が枝も見えるは春の無間山

株木（二二・二三）

と詠まれているように、日坂へ向う途中に無

間山というのがあり、そこに観音寺という曹

洞宗の寺があつて、その寺にあつた鐘が「無

間の鐘」である。この鐘を撞くと現世では福

徳長者になれるが、死んでから必ず地獄にお

ちるといわれていた。それで住持が下ろして埋めてしまった。というのである。一九の「膝栗毛」にも、

「伝へ聞く無間の鐘はその寺に名のみ残りて今はなし」

と書かれている。その辺が「小夜の中山」で山ひるにこまるは夏の無間山

というところであつたらしい。巨眼（二四・一八）

### 25 日坂

金谷から日坂までは一里二十九丁（七・一キロ）である。その間に、西行の歌、

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

命なりけり小夜の中山

で名高い「小夜の中山」がある。その道のまん中に「夜泣石」があつた。広重の絵にも

その石が描かれてある。

じゃまな石夜はひとりてかなしがり

（二二・三〇乙）

夜ルは泣き昼は旅人の邪魔になり

（二二・三三）

行列を堅ぎきにする夜泣石

（二二・三三）

朝霜にきえて泪の夜泣石

祖山（二二・三三）

中山は石四目屋はくすり也 春森（二二・三八）

などと川柳に詠まれ、その石が夜になると泣き声を出したというのである。

昔、日坂に妊娠していた女があつて、金谷

の里の親を訪ねる途中、この小夜の中山で山

賊に切り殺された。その時の血が石について

夜な夜な泣き声を発する。というのである。ところが、この女が日ごろ信心していた観音が僧になって現われ、女の腹の子をとり出して、付近の女に養育をたのんだ。女は胎でその子を育て、子は成人して母の敵を討った。という伝説がある。それでこの名物に「あめのもち」がある。一九の「膝栗毛」に、「やうやうさよの中山たてばにいたる。こは名におふあめのもちのめいぶつにて、しろきもちに水あめをくるみていだす」

## 近 詠

須坂市 高峰 柳 児

重役のきびしさ眼鏡つかい分け  
澄む月へ深呼吸して立ちつくし  
衣替えまだ派手とせぬ更年期  
休田に隣りのみのりまぶしすぎ

太洲市 米 沢 暁 明

日本のこころすすきの揺れに知る  
ろうそくを明るいものと知るキャンプ  
話し声どこかは起きているキャンプ  
しおらしく朝日へしぼむ月見草

今治市 月 原 宵 明

美しきものみな か細き命もつ  
酔ったのが靴替えられた方だった  
遺句集で白柳笑顔でごきげんさん

とあり、

鈴のもちでもだまらぬは夜泣石

寿(三七一九)

夜泣石側にあじたきうばが餅

錦糸(三六二八)

水鈴も横なりふせる小夜の山棚(三三二八)

と川柳にも詠まれている。

この夜泣石は、今国道ぎわにうつされ、伝説も消えかけている。この坂を下りたところが日坂である。名物にわらび餅があり、

ぜんまいの餅だといって笑われる

小柳(八〇二)

日坂は食はれぬを縄にない

(拾二)

日坂でうわさのたえぬ首陽山清原(一〇二)

名高い畛日坂と首陽山

玉章(四一三)

伯夷叔齊日坂へ来るところ

木質(六〇二)

わらび餅さよの中山中々に

などと川柳は、中国の伯夷、叔齊兄弟が首陽山にかくれて、蕨ばかり食って餓死した故事を、わらび餅に附会している

和歌山市 秋月 宏 方

日本語がないわけでなし仮名で書き

朝の日を拝む姿も仏さま

いくつかの嘘も交えて雄弁家

岐阜市 市 川 鱗 魚

蒿ものに屑屋にべない棒杵

募金箱澄んだ乙女の目にまける

秋蠅のよろよろ軒の吊るし柿

今治市 長 野 文 庫

公害と云う名に罪をなすりつけ

名刺の裏に金にもならぬ役を刷り

勝手つんばも生活の知恵

小松市 山 上 千 太 郎

廃村にも言いたげな道祖神

この夏もこの海で足る地平線

噴水に来てガイドさんもほつとする



川村好郎選

島根県 安達 潮音

入れられず自画自賛して胸をはる  
しがみつく親という名の虚しきに  
背伸びした暮しも棄てん雲を恋う  
遠い娘へ夢見た朝の便り書く  
黙黙黙 言い過ぎて夜書く日記

新宮市 大矢 富子

譲り合う傘二人ともぬれて  
飯炊いてくれんかと言うプロポーズ  
標識のない未来だが迷わない  
ワイシャツのよこれ気にせぬとこが好き  
流灯を見送る父の目がさみし

大阪市 小谷 葉子

夢かきわけて恋の波にのり  
思い出が重なりあってモカ冷える  
青い果実心にそっと持ち歩く  
人妻が描く紫のほのほ  
朱のソファアロマンがわいてくることし

島根県 堀江 芳子

美しい花びらにさえ裏表  
寄り添うて貧しさなどは口にせず  
天高し布団叩けば音が澄み  
ささやかな倅せ靴音高き子と

大阪市 黒田 真砂

イメージチェンジバフが戸惑う顔の出来  
午前様迎え他人めく心  
雲の彼方夢みてて女胸炎やす

高野詣で

振り向けば高野の峯も夜の彩

大阪市 阪上 十止庵

愛嬌も人工甘味めくスター  
保安帽何が建つやら知らぬ身に  
人の背を見つめ見つめて無事な日々  
友情の限界聞いてやっただけ

氷見市 関 美子

それぞれのしつけ小児科の待合室  
オペ終えた青年医師の瞳を信じ  
くされ縁などもう言わず子を凝視



忘れるとわたしの好きな合歓が咲き

姫路市 小 畑 自由朗

教室をカブト虫が這う新学期

事故死の児の机に沈む新学期

遭難の場所をカモメは知って居る

円もドルも縁なき衆生の満員車

竹原市 三 宅 不 朽

ずくずくになって野仏笑み給う

兜虫薬を掴んで死んでいた

石ひとつどけひとつおく人の世か

部屋の隅悔あるごとし夜の秋

守口市 岸 本 豊平次

嫁が来て養老院を禁句にし

親切をそのまま受けぬ眼が返る

幼虫の過去にふれまい揚羽蝶

さあ買えと心齋橋は秋の色

島根県 錦 織 文 子

カタツムリどの子も御先祖の紋をつけ

娘の晴着今縫い終えた小さい幸

病棟へ心のせたい飛行雲

原色に燃えきる花を羨やみて

愛媛県 小笠原 仲 美

つき合えば好青年の長い髪

ピエロ今演技の為の髭を剃る

台風予報明日は新聞来ない島

満たされぬ若者バイク音高し

島根県 榊 原 秀 子

さるすべり今日未だ赤く赤いまま

湿度計心の色も染めわけ

秋ひそか今日は鏡へ帯をしめ

庭師の手借りれば石がものをい

大東市 荒 木 鶴 翠

ロングヘヤー乱してさつとつむじ風

マネキンが水着を脱いで秋となり

氷壁で生命が揺れているザイル

フロントの埴輪パチクリ何を見る

島根県 榊 み どり

久々に揃えば箸もよく動き

庭の石一つ一つの顔になる

すがり切る身のやすらぎをかみしめる

病室の古参にされて夫わびし

島根県 東 原 福 子

いもの葉が露をこぼさぬように揺れ

倦怠期の妻に金魚よりどころ

残された子と初盆の灯を送る

夕映えが悲しきまでに過疎深く

小松市 村 井 城 南

病院のベッドも慣れてすぐ眠むり

異気象象寝やすい風が吹いてくる

柳友の情温かく便り来る

老化現象とは情ない診断

鳥取県 林 露 杖

手花火に妖しくきみの面が映え

すれ違ふオーデコロンを振り向かず

滝飛沫幻消えた岩の肌

寝ころんで見たい機窓の白い雲

守口市 野 呂 杜 月

功五級墓石苔むし世は平和

禁煙の出来ぬを自嘲してベッド

残り火が時に邪道に向けて燃え

大胆なハイカーに紅葉赤くなり

新宮市 川 上 久 司

言い負けてからは息子がたのもしく

真剣な顔パチンコ屋で見つけ

昼寝した顔か疊をつけて来る

合槌を打ったばかりに長話

大洲市 堀 内 暁 風

父と子の対話平行線のまま

民宿の主人人よし話し好き

パラソルの指図通りに漕ぐボート

言い勝って心淋しい帰り道

今治市 原 田 輝 親

デザインは私わたしが織って着る

妻でさえ知らぬ闊志で靴を穿く

冬濤に似たる疼みよ明け近し

秋の雨言葉少なき妻と寝る

羽咋市 三 宅 ろ 亭

虫たちのオーケストラき過疎におり

ハイミスを抱えた親のしわも増え

百舌一声群雀しばし鳴りひそめ

訪う人のように野分の戸を叩き

島根県 志 賀 美 栄

合せ呑む度量を持たぬ瘦せがらす

鳴りたくはない日もあろうに風鈴の

逆らわぬ夫の厚みに支えられ

鳥取市 山 形 春 海

妻と娘の不平夜市に捨てに出る

部品まだそのまま古稀にたどりつき

代筆より母の当て字にある温み

浦和市 小 池 鯉 生

院号の無い墓心易う見る

片膝をつく薬屋根の台風禍

梢翔つ二羽の鳥の秘め言や

岡山県 嘉 数 千 代 香

母と歩いたあの日の道を予と歩く

まな板の凹みに亡母の声を聞く

荒れた掌に今日の倅せ握りしめ

高知市 竹 崎 寛

映画「ガラスの部屋」より

かき鳴らす弦燃えてくるため息よ

別離とはこんなに愛が哀しいの  
落ち葉降る彼方へ愛が消えてゆく

竹原市 楠

貞子

ロマンティックな名で月見草夜を咲く

迷信を笑える人の倅よ

幸薄き花ばかりなりバーの椅子

守口市 樋

口一峯

体験がそのポイントを忘れない

灼熱へ蘇鉄は緑を吹き上げる

捨てられたはずの過疎地の素晴らしさ

大阪市 柳

原静香

虫の音が聴えぬ身にも秋を知り

夫を待つ台所だけ灯がともり

孫への道は乗り替えも苦にならず

岡山市 山

田止水

銚子振る癖がついた披露宴

廃屋と共に軍靴の感謝状

逃げるまで待ってる肩の赤トンボ

七尾市 松

高秀峰

老人の日に老人の自殺記事

一服の茶に茶柱が二つ立ち

待合室夫婦交互に腰を掛け

竹原市 生

信笑子

見つめてる愛は不変のものだろうか

花となるつばみ静かに時を待ち

教会の鐘はまっすぐに聞こえて来る

米子市 石

垣花子

公害に街路樹秋も待たず散り

陰膳も今宵は月の見えるとこ

なよなよとしてコスモスの咲きつづけ

鳥取県 両

川洋々

靖国の父と同年なじ年になり

真相を打ち明けられた方も泣き

少数で吐く正論はもみ消され

鳥取市 近

藤秋星

凶作の故郷の便り胸を締め

図書室にひっそり一輪挿の菊

雨男の異名貰って雨に去に

弘前市 福

沢淳一郎

出稼ぎの先から実り問う便り

誕生日妻の心がにじむ膳

胃を切って番茶がうまい今朝の床

新潟県 高

野不二

恩給で酒もひっそり飲む暮らし

梅漬けのいつかなくなる暮らしむき

笑わせて帰った仲のいい見舞い

松山市 谷

のぶお

老人の日も働ける靴を穿き

はち切れる若さにホットパンツ堪え

蘭の香が二階へとどくよい寝覚め

愛媛県 小 山 悠 泉

まごころにふれて心の錆が取れ  
虫鳴いて虫鳴いて思案がまとまらず  
面影を消し度い女が胸に住み

藤井寺市 古 結 百 水

今更に時効のようなひとに遭い  
それぞれの暮らしの枷に居て想う  
幸わせに過ぎて幸わせ気に召さず

大阪市 河 原 林 比 呂 路

人生のあまから知った鬢の霜

さりげなく席を譲られ歳を知る  
仮面まで替えてもネオン追う男

大阪市 西 本 保 夫

お互いに叱られている平社員  
気の合うた友あり彼も平社員  
ポケットベル雲雀のような音で啼き

西宮市 河 相 富

藻のかげに金魚睡みて夕日落つ

出雲路にて

国引の神神の恋 草萌ゆる  
オアシスの夾竹桃の色が冴え

東大阪市 落 合 思 月

未来図に酔うて二人のむつまじい  
真夜中の電話二階も起きて来る  
まだ何か云いたい母を瞳で押え

松原市 玉 置 重 人

状勢が変り公約うろたえる  
のしつけてはみだしている下心  
乾杯のビールに明日の夢があり

和歌山市 飯 家 和 美

風音に雨の音にも深む秋  
天守閣月を間近かにとらえたり  
健やかな生命給わり秋の風

松江市 内 藤 喜 夫

津和野を訪ね 一句

マリヤ堂塔は悔悟の曇り空  
清貧に詩があり歌あり夢があり  
言い勝った悔いひしひしと日記書く

和歌山市 樫 村 ふ み よ

歩行者天国地獄のような人の波  
お茶持って姉の見合いへ好奇心  
筆不精まめなお口で言いわけし

大阪市 堀 口 欣 一

カラーシャツ佐藤総理を初めとし  
若狭富士へドロを知らぬ青い海  
一隅を照らしこの道五十年

大阪府 大 住 文 子

脇見した隙に手元の幸逃げる  
流し元に我名刻みし石を積む  
神の指示思わぬ方へ転げゆく

大和郡山市 森

田 カズエ

病む孫に血縁膚にしかと知る

絵にしたいポーズで授乳する娘

後悔の今日一日へ斜線引く

泉佐野市

大 工 静 子

北海の旅にて

阿寒湖で夢のマリモが多すぎて

摩周湖は吸い込むような色の映え

妻と書かれるお方の羨まし

堺市 栗

本 藤 持

尼さんが運転をする京の風

水涸れた轍のあとにいのち生き

日向ぼこ白を譲ってお茶の味

青森県

波 ただお

腰痛も生きてるし諦める

減反に吹くドルの風冷たすぎ

丹精のアサガオ部屋で威張ってる

和歌山県 熊

野 溪 水

出稼ぎの父の便りに汗にじみ

定食をいつもの指定席で食べ

一円貨財布の中の留守まもる

橿原市 岩

井 本 蔭 棒

皇軍の旗色冴えず戦記閉ず

逆さまの五重の塔に鯉が住む

最後には無口な友が唯一人

鳥取市 有 田

鹿の子

故郷が匂いはじめた車窓開け

又の日へ辛い別れは見送らず

泣きたけりゃ泣くだけ泣くさ明日がある

青森県 岩 淵 一 星

百姓のバトンは受けぬ子沢山

近代化墓も名刺も横になり

何かやりそうな残暑見舞が来

長野県 今 井 岳 太

スズメまでのんびり田舎の反射神経

微動だにせぬ山へ嵐の雲凄む

追憶の小道は今も蟬しぐれ

鳥根県 安 達 小 茶 坊

あぐらかく座へ七人の敵せまり

人生は美醜苦楽の走馬燈

鳴き負けて目白は城に縮こまり

鳥取市 藤 本 恵 子

ふれ合ったグラスへ母の目がうるみ

羨やんだ友にも悩みある様子

宿題へ母の学力まだたしか

鳥取市 藤 本 佳 女

失恋のショックと別な娘の食い気

乾杯に陰の努力もねぎらわれ

親子してまだ漱石は読みつがれ

鳥取市 藤 本 和 宏

仲直りさせて仲裁飲んで去に  
アルバムに祖母花嫁として残り  
小説のように平和でない世相

和歌山県 ふきあげ 虎 城

耳たぶに酔いが出て来た玉子酒  
夜へ赤いバラ一本を挿しておく  
耳たぶの羞恥を知らぬイヤリング

今治市 渡 辺 南 奉

雲止切れ止切れ思い出もう言わず  
しあわせと思える日日へ夕焼ける  
過去水に流そう水は淀んでも

今治市 伊 藤 一 郎

犬掻きで昼の銭湯泳いで来  
サイレント版の花火を見る夜汽車  
野分した朝菩提樹の葉を拾う

今治市 真 山 国 彦

灸据えてやる老婆の広い背  
夫婦箸あちこち剥けて来ましたね  
夏風邪に夫婦で中将湯を飲み

今治市 今 井 松 花

成人向映画風呂屋のピラで知り  
ズンドウの妻に味覚の秋が来る

今治市 古 野 伶 人

学割でヌードを値切る三朝の夜  
石見路へ入って駅弁買い損ね

愛媛県 渡 辺 都 留 逸  
東京で鯛焼を買う順を待ち  
めぐるりんねの孫も酒好き

呉 市 植 田 英 詩

受付の笑顔を止めた終業ベル  
埋立てがすすみ車窓が味気ない

備前市 武 内 雅 堂

停年後無心に眠る父である  
断絶の世に老農の畦めぐり

寝屋川市 福 富 隆 子

仏より子等に合わせた地藏盆  
月赤く地震予知など伝えられ

八尾市 高 杉 千 歩

額縁を合わせてみたい景に在り  
月の雫かボトリと一つ雨上がる

八尾市 高 杉 力

澄みきった瞳が何か物足らず  
生活のリズム始発に揺られてる

松江市 興 富 喜 子

フト母親を忘れ女を意識する  
もめ事も素直になれる年となり

富田林市 板 尾 凡 吉

倅せは酒も煙草も飲む主人

金剛登山 一句  
永が生きが出来る山道苦にならず

笠岡市 山 本 柏 生

過疎の村老人だけの土いじり  
さわやかな香り匂わす白い菊

和歌山市 増 田 めぐみ

祭太鼓に集う平和月静か

月は踏まれても心にはふれられず

東京都 宮 崎 美津子

母の影胸に迫りて虫干しす  
年令不問ろくな職でなし

竹原市 簗 田 浄 美

もう少し見て欲しいの船が出る  
占いもチョッピリ気になる現代娘

羽曳野市 大 峠 可 動

赤トンボ消えゆく国の地平線  
飛行雲末広がり之歌ってた

兵庫県 高 橋 近 江

先ず安堵孫も農業継ぐという  
秋の蠅竈の温みへ世をはかなみ

岡山県 武 元 柳 子

今宵一夜阿呆となって踊りの輪  
明日嫁ぐ二十の秋の虫をきく

大阪市 岡 本 まさひろ

野仏に知られてるのに知らぬ顔  
ゴキブリの非業の最後見とどける

今治市 大 本 バ ッ ト

絶景をバックに美人借りて撮り  
検診車自信あるのがよくしゃべり

大阪市 塩 満 敏

大ざさに言うほど馬券買うていず  
若狭湾青い青い海でした

尼崎市 中 谷 利 美

忘れ得ぬ人の名前を娘に一字  
ロマンスのない両親をふしぎがり

宿毛市 山 本 窓 花

葬儀屋の移転丁寧な案内状  
秋風に鳴る風鈴の孤独感

大阪市 平 井 露 芳

百までを数え大人も湯に浸り  
クーラーがいよいよ窓にぶら下がり

羽曳野市 麻 野 幽 玄

おしゃれして見たし秋風青い空  
手を触れて母の湿り探す墓碑

和歌山市 垂 井 千寿子

ハイキング腹時計から道はかる  
追善の席に思わぬかくし芸

松江市 本 庄 快 哉

穴道湖に四季あり四季のはやいこと  
山下清を悼む

兵隊のくらいはどこになる清

岩国市 村 井 酉 合

感覚に酔うて溺れぬ年の功  
忘れぬ唄カナリヤは声かぎり

山口県 栗

井 さちえ

人様に見えない色で塗った幸  
一言を呑みこみ円い灯を囲む

新宮市 小

山 峻

本心を吐かす酒かと見破られ  
本心までも酔わぬ男の面構え

鳥取県 福

田 陽山

月世界兎も見えず夢を消し  
空も海路も其々にラッシュなり

鳥取市 藤

本 鎮也

争えぬ小じわへ母の老いを知る  
アルバムの母別人のように見え

仙台市 川

村 映輝

夢で見たヒント目覚めてたわいなし  
ゆっくりと旅もできない菊の秋

八尾市 古

川 鶴声

百鬼夜行都会の隅にたむろして  
親娘とは見えぬ母親ミニをはき

大阪市 本

間 満津子

世間並みに関心をもつドルシヨック  
失明の母へ匂いの贈りもの

今治市 葛

本 昌道

転業をしてもやっぱり壁があり  
嫁ぐ娘へ夫婦の汗を实らせる

香川県 西

山 綾子

ご近所を話せば夫唾になり  
馬鹿々々が四五日間けぬ出張中

大阪市 木

村 濁水

押売りが帰り急いで鍵をかけ  
異状潮位0メートルに気をもませ

高槻市 山

田 スミ子

精一杯今日も働く幸があり  
無意識の大阪弁を笑われる

河内長野市 森

本 黒天子

勿体をつけても年齢には逆えず  
桐一葉そぞろ身にしむドルシヨック

大阪市 藤

田 頂留子

父母の齡越えて敬老祝われる  
予約車にまかせ旅への朝を寝る

大阪市 今

井 隼人

雷鳴におへそ押えて母の膝  
逃げられた魚だんだん大きく言う

大阪市 岡

部 シゲ

逃げられた魚だんだん大きく言う  
楽天家何でも明るくしてしま

大阪市 花

田 繁子

老いの食欲ヒンシュクのまなこ寄る

名古屋市 吉

田 文枝



真の句のねうち

## 句集「山の灯」評

橋 高 薫 風

蘆酒は句集である。淡い白地の表紙に金で「山の灯」とある。背にも金色の「山の灯」が光り、模本聡夢の著者名は深い緑の山の色である。隙のない装幀は著者の人柄を思わせる。

その序で近江砂人主幹は「俳句熱の旺盛な京都帝大にあって卒業後川柳に道を求められたのは、一つの見識だったように思惟する」と云っておられる。柳歴三十余年の句、三万五千の中から厳選された作品は、一口で云えば穿ちを立体にした真の句と云うことが出来る。番傘一筋に歩んだ句風であると云うことである。

羽根ぶとんやっぱりこわい夢をみる  
大雪の記憶がちがう老夫婦

かくていま思ひ出の辞書子にゆずり  
使わない盃一つ菊の紋

このころの悩みに妻が推理つく  
貫録は徹頭徹尾口を閉じ

ほんとうの勇氣裏切り者に見え

法科出にまあまあが気に入らず  
七色の汗が出そうなアロハ着る  
救世軍見えざる敵ヘラッパ吹く  
刑務所で出来た良心的な靴  
古梅園きようは借用証を書き  
こう並べて見ると、いずれもの句が隙のない穿ちに裏付けられていて微動だにしない。著者の年輪を思わせられるのである。中には、

試歩の道味方のように菊が咲く  
水筒がちやぶちやぶ山を下りて来る  
雷のお詫びのように虹の橋  
こだます方にいそうな青い鳥  
といったほのぼのとした味の句もあれば、  
贈られてアバタもエクボ式書評  
朝駆け夜討ちセールののご執心  
うつむいた旗を励ます風が来る  
むかしから国籍不明宝船  
のような番傘の悪趣味の表現に頼った句も散見する。

筆の立つ著者であることは巻末に掲載されている「時の川柳」の企画に応募入選された論文でも推察出来ることで、番傘の総務、編集長を兼ねておられる著者の強みである。

近作百句の項に掲載されている、  
老醜と見たかアジビラ手にくれず  
甲論乙駁もう円心を見うしなう  
後世の史家を信じる無抵抗  
倒産のわけの一つに下剋上

わが歴史カラーページはすぐ終わる  
等の作品は更に深まった句境を示されている

ように私には思えるのである。  
川柳の真諦である峻厳なる穿ちの味を一段と深められて、真の句の大成に力を致されんことをひたすら希望して書評のしめくりと致します。

★

▼中島生々庵主幹は「総合芸術協会」の協会推薦で理事になられた。生々庵主幹選で左の作品が八・九月号の芸術文化に紹介された。コレクションに罪あり料理文化の密枕

若本多久志  
値切つてる妻を離れたところで待ち

川村好郎  
琥珀色の湯呑みの主は生き字引き

西尾栞  
負けん気でなしによかった娘が二人

高橋操子  
胡瓜 茄子 どっさり漬けて心満つ

西出一栄  
ポロポロにしていて沖縄身請ける

不二田 一三夫  
○

ワンマンカーやもめ暮らしという姿  
菊沢小松園

北浜にくすばったまま男老け  
大坂形水

うつりゆく四季起き伏しを舞う扇  
若柳潮花

忙しいやないかと税務署はめてくれ  
傍島静馬

すし屋のふきんあれも拭きこれも拭き  
有信 新之助

ウーマン・リブ男も産めと云いたそう  
不二田 一三夫



## はたらくうた

国体役員 小西無鬼

古稀近き僕に還暦でついてくる  
その理由下手にしゃべれぬ遅れ馳せ  
髭剃って夏バテ少しかくせたる  
生きている証拠の雲の峯を見る  
ふるさとに住む幸螢も目高も居

今もなお私一番心身を消耗さす仕事にボイスカウトがある。二十年近く委員長と云うよりも事務、指導、上部連盟との連絡、講習会等一切、青少年育成を称えて自縄自縛と云った形。四十年続けてなおあの世まで持ち行く川柳の足を引っ張るのはこれ。家を空けられない状況にある為とRCより特に少し補助を呉れたりするから余計に責任感でしぼられる。しかしながら子供達と接触があり、時に道話等試ると一かど若い者と同じ気持になり我が歳も忘れる、これでも日支事変バイアス湾敵前上陸と第二次は長崎で原爆にあい、命冥加な男後幾年か。

国家公務員 中川晃男

六法に助けられ六法に縛られる  
手錠の青年肩怒らしてすれ違い  
良心に誓って法廷嘘もつき  
罰金を納めて礼を言うて去に  
有罪の判決窓の外も雪

昔検事局—今検察庁、こわいお役所なりやこそ川柳が大切。アチラ生まれのアチラ育ちが敗戦のおかげで祖国の土を踏むことができず四半世紀も経った。日本海の汐風にさらされて少しは遅くなったかと思いきや、大陸仕込みのオットリ型も人間関係の複雑さに泣かされシキタリに叩かれて、島国の山陰らしく狭い小っちゃなところに変貌。どうやら周囲が見えるようになったと思ったら人生の方も残り少なし。人が人を調べ裁判にかけて罰金を戴き刑務所に御案内する、社会秩序を保つ為とは申し乍らあの世でエンマ様はお見通し。どうしても極楽行の切符は買えませぬか。



## 同人特集

国家公務員 奥谷弘朗

小役人 望を捨てた顔に見え  
 大山を我が庭にして男生き  
 自転車が性に合うのも小役人  
 山男今日うぐいすに聞きほれる  
 小役人口ほどにない肩の巾

昭和二十四年七月二十三日シベリヤの抑留生活を終り引揚げて、翌年の六月縁があつて倉吉営林署に拾つて戴き、農林技官と云ういかめしい肩書をもらい、もう二十一年が夢のごとく過ぎてしまった。  
 騒音や大気汚染に悩む、都市の人々と比べて木を相手とし、山を職場としている者にとつて、自然が創造する山の四季は素晴らしい。新鮮な空気の中で仕事の出来るのは山男の特権でもある。これからも小役人の句を詠いつつたいと思っています。

協会事務局 水粉千翁

白壁のシミ ふるさとの光る町  
 江戸の虹 ここに倉敷川へ架け  
 くらしきの路地 ニッポンの風が抜け  
 旅の雨 倉敷川にぬれてよし  
 安らぎの吐息を 美術館に酔い

(『倉敷春秋』創刊号掲載より)

白壁の路地を抜けて美術館を横目に、倉敷川畔の白鳥にウイंक、柳の並木に季節を考えながら、ずらり文化財の倉造り。「これより代官所跡へ百米」の道しるべを、また右へ左へ折れ曲る。朝夕十三分間の風物との対話。私の或る人生の、いまの一コマである。  
 通産省所管、科学技術庁、工業技術院の睨み。高度成長の日本経済を動かす猿真似技術を自主開発へと夢を追う、情報化時代への焦点に目を合わせ乍ら。およそ川柳とは似ても似つかぬ両極の世界でこそ、人間であり、人間たらんとする川柳に一入の愛着が生まれるのかも知れない。



## はたらくうた

紙器製造業

河内天笑

男一匹反旗は逃げ場こしらえず  
通せんぼされても道はひとつきり  
軽四で稼ぎ乗用車で遣い  
儲っていますリズムに乗ってます  
天衣無縫小策は受け付けず

たった三年余りだけれど僕にもサラリーマンの経験があります。オールバックにネクタイ背広ピカピカの靴、なつかしい時代です。ところでこのスタイルなんぼたっても僕にはピッタリ来ず「俺はサラリーマンやない」とけなげなる決心で家もとび出し電話一本ひっさげて天下茶屋の文化の二階を事務所兼寝ぐらにしてスタートしたのが現在の商売です。これは僕にとって昭和36年夏の陣でした。「与られた条件にベストを尽す」をただひとつのモットーとしそれ以来仕事にも健康にも恵まれています。ほんまもん人生を目ざして仕事と川柳の二本立てで楽しくやっています。と思っています。

ファッション・デザイナー

宮西弥生

販売へまわされて来た口上手  
錠前に頼る女の稼ぎの身  
ラーメンで超過勤務稼いどき  
ゴム長を脱ぐ休日へ三面鏡  
働いている者同士で口達者

学校の先生になるつもりでいたのにデパート勤めのデザイナー。開店までの準備や掃除に徹底的に訓練され、サービスの明け暮れにすっかり飼ひ馴らされました。

どうも外部からは優雅で香気な仕事に見えるのですが、なかなかどうして、高所得者向きの売場に所属しているだけの話です。

でも季節の衣更えや、特に結婚シーズンともなれば私達の繁忙期。花嫁衣裳にご本人以上に夢中になって働きます。漸く出来上がった時の嬉しいことは言いつくせません。やっぱり好きな道に進んでよかったときびしくとも楽しくお仕事をして居ります。

うどんや 有信新之助

近況

炒めてる音の割には味がでず

素うどんは売れぬか書いてないミナミ

厭な客くれたお金に頭さげ

灰皿になつて帰つたうどん鉢

立ち喰いのうどんへネオンが消えてゆく

「あんたとこのうどん食べたら、よそで食べられへん」と云ってくれる客が時々ある。それほど誉れ高き私の店へ、二三軒食堂を通り越して来てくれる、バスガイド嬢達が「今度の休みに、何んか御馳走食べに行こか」と相談しているのが聞える。唯おいしいだけでは、御馳走の資格は得られぬものらしい。なるほど私の店の最高の物の五倍を出しても、大したデキは食べられない。しかしポケットを探して、百円玉一枚あれば、おいしいきつねが食べられる。やはりうどんは庶民のものだ。時代がどんなに変わっても、うどんだけはすたれまい、と自信が湧いてくる。

久米奈良子

「はたらくうた」第一回に参加させていだいてから早くも六年、実りの秋を迎えたのに私の両手には何の収穫もないのをはずかしく思います。

その間、母の病氣と法事と転宅を繰り返して、あわただしい毎日が過ぎていきました。

教場も二度変り、やれやれと思う間もなく今春遂に寝こんでしまい、やむなくお稽古も休むことになり、大勢の人にご心配をかけ申し訳なく思っています。

八月、叔母の死が転機のように、近頃やっと心身ともに落ちつきを取りもどし、ありがたいことと思っています。

早く作句のできるよう、心のゆとりをもちたいとねがっております。

発心の硯を洗う春の水

春さぐる掌にあたたかし母心

両輪の如く母臥し娘も病んで

育めばポリオの筆も文字が生き

天職とさる正座のしびれきれ



## 酒田清子さんを悼む

西田 柳 宏子

川柳雑誌時代から姉妹作家として知られた酒田清子さんが、九月五日午後七時三十分丸六年間入院していた市立桃山病院で亡くなりました。衷心より哀悼の意を捧げます。

御家族並びにお姉様に当る一栄さん方の御配慮もあって、川柳塔社に知らされたのは葬儀も終った九月八日であったので柳人の会葬は一栄さんだけだったことは私共にとっては心残りであり、清子さんも淋しかったと思われる。

清子さんがゼンソクで入院されたのが昭和四十年八月十日である。爾来六年間病院の名物的な存在で、毎週短冊に自作の句を書いて病室や廊下を飾り、看護婦さん達からも親まれ、自他共にボスと認め、治療の過程として体質改造のため非常に肥えて貫録も充分でした。玉造句会にはよく病院を脱走(?)して出席された熱心家でした。

戦時中から戦後にかけて苦勞をされ、御主人の御病氣もあり本当になりふりかまわずに働かれ二人のお子様方も明るく立派に育て上

げられたのである。句会へもいつもスラックス姿で人なつっこい笑顔で一栄さんとよく漫才コンビだなどと笑い乍らジョークをとばしていた姿が目に残る。ただ持病のゼンソクで苦しそうな息使いが印象的だった。

春果先生が院長として赴任された頃など張切って、斗病中の作句をして居られたようである。一栄さんが入院された折など随分心丈夫な存在であったことと思われまします。

非常に又綺麗好きで付添いの小母さんもしては呉れたがよく自分で洗濯物など小まめにして亡くなられたあとも肌につけるもので汚れものは見当らなかったとか……。

最近ばかりあい好調で入院中に二人のお孫さんとも出来、娘さんの章子さんも阪急沿線の正雀のお宅に二階を建増しをして、清子さんを退院したら来て余生して貰うと楽しみにして居られた由、急変に驚いたようです。

亡くなられる前日、一栄さんのお家から好物だった諸等を届けた時も非常に元気で退院の相談などとはしゃいで居られたようであ

す。亡くなられる日の午後三時頃独りで入浴され五時頃病院の夕食を済ませ、果物を食べながらテレビでキックボクシングを見て、そのあと一人で氷を取りに行き心臓麻痺で倒れ、早速三十米にも及ぶ心電図をとりながら強心剤の注射等手を尽したが遂に不帰の客となられた。

法名 清譽貞從禪定尼 享年 六十歳

本年十月で満五十九才を迎えられる若さである。川柳の方も益々油が乗って来られた折柄、育ての親とも云うべき清水白柳氏の逝去、更に北川春果院長が転任で居られなくなり、急速に熱意を失われた様子でした。とは云うものの独特の清子さん流の川柳眼を通して見た病床からの投句は川柳塔欄で御覧の通りであり、後に掲載させて頂くことにします。これは特に一栄さんからの選句によりました。

数年前姉妹句集を出そうかなどと笑っていたことがありました、折も折、一栄さんの句集「ねつくれす」が刊行されたが泉下の清子さんへも何よりのプレゼントが出来たものと思われまします。

清子さん、長い暗い一人旅のあと、雲の峯で路郎先生に、白柳さんに、そして多くの柳人先輩等に迎えられ再び川柳熱をとり戻して笑って居られることと思います。

心安らかに御冥福をお祈り致します。合掌

## 清子句抄

情熱の枯れた時樹水のようにになりたい

心臓の鼓動夜のしじまの秒をよむ  
新薬へ今度こそはと言う期待  
新聞テレビ喘息の文字見逃がさず  
静かでないだらうな目になれたら  
院長回診慌てて拭いたり着替えた  
雨の日は電話で孫の歌を聞き  
腹巻をきて宇治金時のお替りし  
ガタガタの両手に孫がブラ下る  
うすれ行く視界へ目をこすりまばたきし

## きのこきょう

### 本多 柳 志

◇柳志の古い句に「まだ若いつもりが席をゆずられる」と云うのがある。若い若いと思っていた私も七十に手が届くまでになった。

思えば長生きしたものである。学校を出て満鉄入社のための健康診断のときに、診断が全部さんだカルテを見ていた医者がそばの看護婦さんとかお見合せて「すばらしい健康ですわね」といわれて、思わず胸を張ったものだ。第一生命へ契約するときも医者から「八十五歳までは私が保証しますよ。八十五歳満期にした方が掛金も少くて得ですよ」といわれて期間をのびしたこともあった。その頃から約四十年病気というものを知らない。とに角達者である。末子であったせいもあるが親からは、格別財産らしいものは何一つ貰っていない私であるが、千万金にも代えがたい

食べられる頃には見舞途絶えがち  
心臓がも一つ欲しい世相なり  
胃袋もうんざりしてる胃カメラ  
主治医今日心の中もお見通し  
病室は季節無視した花が咲く  
帰る気へおせち料理を届けられ  
白黒があるから人生張りがあり  
無意識に呼吸する人のうらやまし  
調子の良い日は注射の針がこわい

こんな達者な肉体を授かっていたのだ。よくぞこんないいからだに育ててくれたものだと今頃になって亡き両親への感謝の念で一ぱいである。そんな時に出来たのが「四恩かみしめれば入れ歯きしむなり」という句である。

◇そんな私も近頃になって人間の年令や寿命というものを時々考えることがある。としたなと思う。川柳に入ってから二十一年、先輩や友人に励まされ、教えられてこまで来たのだが、其の間に多くの柳友先輩の死を見送った。其のたびに所謂人の世の無情というものを感じ、人間のいのちのもろさというものを知らされて、限らないやるせなさ淋しさを味わされた。梅里さんの急死の時もそうであったが、昨年の白柳さんの急死を報らされた時は、実際からだが震える程のショックであった。毎月の柳界展望欄で同人死去の記事を見るのは一番いやな時である。

◇人間七十に近くなると日頃達者な人でも、どこかに故障の出るものである。元気なAさ

思い直そうまだまだ重患がいたはる  
私服着たナースのなんとあどけなさ  
母逝きで不幸の詫びる術のなし  
今日あたり孫来る予感ようあたり  
蟹は横に這うからたむれたくなり  
ふところも知らず転地療法がいいです  
元旦の白衣の勤務まぶしく見  
パジャマなど新に着替えて寿が  
貧乏神と病の神の板挟み

んも腰が痛い仕事を休んでいるらしい。Bさんも神経痛らしいといった具合に。自動車エンジンにしても痛んでからの修理は大変であるし、手おくれである。痛む前の診断が大事であり、機械を永もちさせるコツであろう。更年期は女だけのものではないらしい。柳友よ自分の健康には十二分の注意を払おうではないか。百までも生きてお互い佳い川柳を作ろうではないか。柳志も友人より早く往きたくはないが、友人にも早く往つてもらいたくはない。川柳あつての人生であり、柳友あつてこそ楽しい余生だと思ふからである。

ふぐ鍋へ達者な箸がからみ合い

柳志

### 若本多久志著

「親ごころ・子心」  
「老いの坂」

送料共 二八〇円  
送料共 五六〇円  
共

# 川柳家の暦

(十一月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった著作である。十二月分までノートに書かれてあるのを順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。

(編集部)

## 遺稿 清水白柳

1日	磯部 鈴波 M 40 丁未 大阪	4日	原 独仙 M 36 辛卯 出雲	13日	山 光岡早苗 S 8 癸酉 岡山	22日	旧曆を笑えば月は旧で出る
1日	所の ゆきら M 43 庚戌 京都	6日	森本 黒天子 M 26 辛巳 大阪	15日	桑原 狂雨 M 44 辛亥 豊中	15日	法善寺もとの他人になるさだめ
1日	藤井 一二三 T 15 丙寅 堺	6日	塚崎 松郎 M 27 甲午 大阪	15日	島崎 顕童 T 11 壬戌 高知	15日	公害を気にしていたら生きとれず
2日	竹内 出樹太 M 36 癸卯 神戸	6日	増田 次章 S 7 壬申 東京	16日	小原 芳朗 T 11 壬戌 盛岡	18日	かくれ酒こどもがみつつけお父ちゃん
2日	床の間のダルマ大師に父似てる	7日	石原 青竜刀 M 31 戊戌 東京	18日	上田 枯粒 M 42 己酉 京都	18日	秋が星だらけ酔うて帰った風呂の湯気
2日	地球儀の日本が直ぐに見つからず	7日	小池 鯉生 M 40 丁未 浦和	18日	河村 日満 T 3 甲寅 鳥取	18日	神も仏もあるかと戦後から変り
2日	線香とマッチ泣けない男だけ坐る	7日	深井 凡々 M 42 己酉 奈良	18日	野田 素身郎 S 4 己巳 倉敷	18日	夫婦養子小さな声でする
3日	北村 白眼子 M 28 乙未 函館	7日	和やかに緋鯉寄り添う神の川	19日	新岡 回天子 M 40 丁未 佐賀	19日	老いたるといえど女と酒は別
3日	想い出とねれば憎めぬ人ばかり	7日	藤井 明朗 M 43 庚戌 島根	21日	森本 鯨波 S 19 甲申 高知	21日	爪切つて女のうそが研かれる
3日	柴田 一掬 M 42 己酉 神戸	7日	窓閉めて悴せな日早う寝る	21日	横山 たけし T 1 壬子 宿毛	21日	痛むゆえにこの鳥居にも顔なじみ
3日	お念仏申した口とおもいつつ	7日	小川 恒明 T 7 戊午 大阪	21日	横山 たけし T 1 壬子 宿毛	21日	痛むゆえにこの鳥居にも顔なじみ
3日	新谷 笑痴 T 6 丁巳 堺	7日	果立ちする喜び眠れないんだよ	21日	森本 鯨波 S 19 甲申 高知	21日	痛むゆえにこの鳥居にも顔なじみ
3日	宝石の世に出るまでを耐えている	9日	谷井 扇水 T 1 壬子 倉敷	21日	森本 鯨波 S 19 甲申 高知	21日	痛むゆえにこの鳥居にも顔なじみ
3日	阿部 柳太 T 8 己未 富田林	9日	直つぐに伸びる物干竿にされ	21日	森本 鯨波 S 19 甲申 高知	21日	痛むゆえにこの鳥居にも顔なじみ
3日	尻馬と分かり始末書だけで済み	10日	田村 藤波 M 19 丙戌 岡山	21日	森本 鯨波 S 19 甲申 高知	21日	痛むゆえにこの鳥居にも顔なじみ
3日	平田 のぼる T 10 辛酉 宅岐	10日	人生の約束 火葬場の煙り	21日	森本 鯨波 S 19 甲申 高知	21日	痛むゆえにこの鳥居にも顔なじみ



22日 源田 琴波 M33 庚子 福井  
秒針の音もチャンスを告げるよう  
23日 山崎 小鮎 M42 己酉 高知  
隣席も味方と知れた大飛球  
24日 山口 来案 T4 乙卯 徳島  
好きな人画いて未熟なテクニク  
25日 森田 玉兔 M24 辛卯 北米  
日本で仕上げた芸の五つ紋  
25日 田中空壺 M33 庚子 浦和  
三人が三人酔って別れ得ず  
25日 嘉数 裕江 M36 癸卯 岡山  
空洞をうめる言葉の辞書を繰る  
25日 天満 千代 M41 戊申 東京

機関車の鐘満鉄の音となり  
25日 所 典夫 T4 乙卯 長野  
指先きの汚れも今日を生きのびし  
26日 池田 太郎 M44 辛亥 岡山  
何を願ひ何を求めてゆく若さ  
26日 太田 幸代 S2 T丁卯 高知  
お隣りの子猫を帰す堀の穴  
27日 岩田 美代 T10 辛酉 富田林  
背を向けて次の偽り待つゆとり  
28日 松村 喬村 M44 辛亥 高知  
酔い足らぬ仲居に箸が回って来  
28日 吉岡 通児 T13 甲子 松江  
田舎出と知れまいとして口ごもり

28日 阿戸 吐詩郎 S3 戊辰 小松  
整理案職工無駄な数にされ  
29日 日野 華水 M38 乙巳 名古屋  
大掃除藤椅子暑いとここに居る  
30日 鹿島 一甫 M35 壬寅 東京  
雪山の素顔怒った母に似る  
★宮西弥生さん(東大阪市同人)から一葉の花句会とささやま句会合同の松茸狩りは盛会でした。野外食事で松茸ご飯より栗ご飯ばかりいただきました。天気はよし、食欲の秋ともなればお茶碗に四はいという大食ふりを披露してしまいましたーと。

# 落語

## 不二田一三夫

前号「川柳人とユーモア」で中川晃男氏は、川柳人にユーモリストはすくないーと書いています。同感である。ばくもふくめてどっちかと云えば、怒りっぽい人のほうが多いのではないかいジョークをとばすにも、よほど相手を意識しないとドレらいことになる。落語は東京、漫才は大阪といわれているが、落語のおかしみは古川柳の味だ。この味がだんだん薄れていくのはさびしい。今はカッ

★西日本新聞暮らしの百面相から  
真打となつて紋付よく似合い  
桂 枝太郎  
落語家の数は現在、約三百人(うち東京だけで約二百五十人)。これらは前座、二つ目、真打の三つの「階級」に分類される。また二つ目および真打は、それぞれ上中下の三つのランクに格づけできる。真打の上級が、文字どおりの第一人者、ということになる。

服装は前座がしまの着物、二つ

目から紋付を着用できるが、これに目がきがかかった真打になつてからである。

辛らつな批評は客席からアクビ  
不二田一三夫  
作者は月刊誌「漫才」の編集者。枝太郎氏は「はなし家殺すにや刃物はいらぬ、あくび一つで皆殺し」という明治時代からの都々逸があることを教えてくれた。

落語家の司会古典は誰が継ぐ

山路都星  
(小泉戸牟)

営業所

阿倍野店

堺吉店

住野店

平島店

都島店

今福店

十三店

九条店

crcdit system

丸越

月賦百貨店

良い買い

良い安い

本社 大阪市阿倍野筋3-15-1

TEL 632-3806 3807

ホク ロ

宮尾 あいき選

付けボクロミに書こもコンパクト  
ホクロさえ美人に付けば美の要素  
同窓会ホクロの位置で想い出し  
新妻のホクロみつけたハネムーン  
あの強いおかたにも泣きボクロ  
首筋のホクロみつけた初デート  
色白なだけにホクロがよく目立ち  
名前より先きにホクロで覚えられ  
人相の悪さホクロが輪をかける  
頬つべたのホクロが愛嬌者にする  
運命を易者ホクロのせいにする  
保護願ひホクロの場所もかき添も  
泣きボクロあつて泣けき意地を持ち  
運のいいホクロを持って病みつ  
ホクロ質めきた易者へチップ置く  
ホクロでも取ればと不幸が迷わ  
氣にすき氣にも位置の泣きボクロ  
髭をそる度にホクロに邪魔せられ  
何よりの証拠身元を知るホクロ  
付けボクロ女は夜を切り抜ける  
無い方がずっとよい付けボクロ

確認に役立つホクロとは悲し  
ホクロまで親に似て孫誕生す  
氣にかかるホクロ彼女もお年頃  
ホクロまで取って他人になりすま  
婚約へちよつと氣に泣きボクロ  
長命のホクロの人と空の旅  
タレントのホクロを真似て画  
泣いた娘の頬にホクロが消えて  
でばちんのホクロ仏像のよに見え  
福運があるとホクロをおだてとく  
初孫の握りボクロにある期待  
太陽のホクロへ天体望遠鏡  
ホクロにも白毛が生えて祖父達者  
名声がホクロの艶を増してゆき  
福ボクロあるのに金にめぐまれず  
色っぽくみせるホクロが仇になり  
女優さんのホクロみつけた大写真  
佳  
添寝するママのホクロをもて遊ぶ  
意地悪いホクロを隠す厚化粧  
母に似て涙にもろい泣きボクロ  
女一人生きねばならぬ付けボクロ  
お化粧に邪魔なホクロはいじめ  
人  
見覚えのホクロみつつけて泣きく  
地  
母でさえホクロたよりの双生児

本藤 朝吉 祥月 七面山 曉風 杜月 和宏 同恵子 鎮也 佳女 久司 カズエ 陽山 綾女 同二 肖二 双楽 久司 止水 利美 西合 西合 杜月  
天  
耳たぶのホクロをはきイヤリング 代仕男  
軸  
老婆の色香とどめる 鈴ボクロ  
足並み  
江国 幽谷 選  
お彼岸の足並み揃う天王寺  
足並みが揃わずストがまた流れ  
足並みの揃う二人は腕を組み  
足並みも揃うて通るランドセル  
逆境に挑む足並み乱れがち  
足並みが揃うてカメラにむかえ  
ギャンブルになれば足並み揃ひ  
足並みのそろうたところで飲む話  
足並みが二次会からは乱れだし  
足並みのそろわぬ内に抱き込まれ  
足並みが崩せぬ朝の靴を履き  
寄付金もやっぱり足並み揃えてる  
頂上が見えて足並み活気づき  
足並みへ先生の目と笛と声  
足並みが揃う真紅な優勝旗  
足並みを月に合わしている二人

足並みは揃えて腹を探り合い 利美  
 足並みを一歩遅れて合わす妻 一郎  
 足並みを外して偏屈 一人住み 城南  
 足並みが揃った頃に断られ 誓二  
 足並みを合わしてゐるのに気がつき 西合  
 妥協してから足並みがよく揃い 扇水  
 初孫へ足並み合わす腰を曲げ 杜月  
 素人の行進 足並みが乱れ 七面山  
 足並みはミリタリズムの音がする 祥月  
 朝の改札出る足並みにあるリズム 万的  
 足並みを揃える会がまとまらず 古心  
 保母の手拍子足並み乗って来ず 春日  
 足並みも軽く秋晴れ詩となる 千代香

佳

足並みの音を揃えて調教師 代仕男  
 号令のない足並みとして揃い 千翁  
 足並みを妻が揃えて 叙勲され 松花  
 足並みを揃えて長屋のわび住まい 保夫  
 足並みが揃わぬ年の差が目立ち 木魚  
 足並みへ陛下 山高帽を振り 里風  
 足並みを揃えることにして負ける 千翁

人

ひっこめたらこんを足並みも揃い 古方

地

損得がないから足並みが揃い 素身郎

天

通 訳

工藤甲吉選

氣も合うがその足並みもよう揃い 古方

通訳は何を言っても無表情 輝親  
 仲裁の所作で通訳中に立ち 伶人  
 抑留の過去が通訳稼業にし 国彦  
 通訳が無くて現地妻通じ バット  
 握手して通訳抜き 誓二

留學生たのみ通訳間に合わせ 代仕男  
 方言に通訳がいる里帰り 敏  
 通訳は手真似も入れて笑わせる 無閑  
 通訳もお国なまりに汗をかき 陽山  
 通訳をあわてさせて専門語 葵水  
 通訳がついて一層偉く見え ただお  
 通訳が笑いそれからみな笑い 一治  
 通訳が学資をかせぐアルバイト 春日  
 通訳が学資をかせぐアルバイト 藤持  
 競古に下手な通訳間に合わず 本蔭棒  
 通訳が引卒してる観光地 曉風  
 通訳もちょっと困った専門語 古方  
 手真似の方が通訳さんよりも通じ 花子  
 コチコチのバイト通訳少し馴れ 扇水  
 愛嬌も伝え通訳行き届き 水

通訳の早口アナウンサーつられ 初甫  
 通訳も見当のつく笑顔 千翁  
 通訳が少しどもった国なまり 里風  
 通訳もなしに他国へ行く若さ 静泉  
 通訳をのけて通じた握手する 不二  
 通訳がほしい手真似にカンが立ち 古心  
 スポーツに通訳いらぬ国と国 どんたく  
 合点の顔で通訳しやべり出し 酔々  
 窮すれば通じ通訳抜きにする 昌道  
 英訳の駄洒落はびんとこんらしく 万的  
 通訳も首をかしげる国なまり 曉明  
 流行語子が通訳を買って出る 佳女  
 通訳も同んなじように激情し 七面山

佳

通訳もできる美貌の女秘書 淳一郎  
 通訳をする僧もいる古都の寺 智司  
 東北の旅通訳がほしくなり カズエ  
 通訳も大臣並みの席に着き 好一  
 通訳へ陛下いちいちうなずかれ 敬一  
 通訳を抜きで手真似で打ちとける 思月

人

のべつ幕なし通訳を困らせる 弘朗

天

通訳がちよいとまどう背の高き 秋月

軸

アメリカさんの鼻見上げ通訳し

# 初歩教室

—題「地」—

本田恵二朗

私は岡山県の北端の山狭の町で生れたが、宮本武蔵の誕生地でもある。そのまた山奥に後山という山がある。文明の今日女人禁制を続行している聖山であるが、そこへお参りする行者（山伏）達がロツコンショウジョウと唱えながら列を連ねてゆく姿をよく眺めたものである。その唱える文句の意味は、六根清浄と書く。その六根とは、目耳鼻舌身意と云うことだと聞く。六根を清く澄んだものにしてよとの願いの声であらう。

われわれ川柳する者にとって、この六根こそ切りはなすことの出来ないものだと思ふ。この六根への反省を繰り返すことによつて人間性が進歩向上してゆくのではなからうか。そして生れてくる一句一句の底には、清浄な六根が生きて流れているのだと私は主張する。このことは、故路郎先生が、いみじくも主張されている、——人間陶冶の詩——の意味に通じるものがあると思つてゐる。そこで、六根の意を、この教室の皆さんが噛みし

めて下さつて、それを根底として、佳吟を生み出して欲しいと願う。

※ ※ ※

地玉子と書かねば玉子と見なされず 頼次  
思つた通りを文字にしたことは、まことに素直なことなのだが、川柳と銘打つには、ただ素直では通らない。もう一と苦心が肝要だ。

（地玉子と名乗つて卯店に出る）

墓参団夫の眠れる土地に伏し 富喜子

前述と同様素直だが、伏したという感慨を句姿そのものに、にじみ出させる工夫が肝要。

（この地下に眠る夫よ墓参団）

容赦なし豪雨は造成地をねらい 万 竿

とらえた句材を、如何にして川柳として表現するかと、苦心のあけくれこそ楽しいことであり、人間陶冶の好手段ともなるのだ。

（造成地雨台風に噛みつかれ）

妊つたらしい地金も顔を出し 美 代

苦吟の跡が見えるが、もう一歩前進だ。

（妊つたらしい地金がちよつと出る）

地続きに建て増し幸待っている 同

幸でもよいが、ピントをぐつとしばつて、

（地続きに建て増し良縁待っている）

地道に歩いて歯がゆくみられてい 翁 童

てい—で結ぶのは、お古いよ。

（地道に歩けば歯がゆそうに見られ）

地下足袋をはたいて今日が癒ゆ 同

（地下足袋の癒えはたいて今日が満ち）

疲れが癒えただけでなく、今日が悔いなく満ちたとするなら、明日への姿勢も前向きであることを意味して、力強い句となるよ。

好きなればこそ意地悪い口も利き 利 美  
句材はよいのだが、表現に味が無いよ。

（意地悪いを言いおうてる好きおうてる）

澄み切つて大地の汚れ知らぬ空 葵 水

（天高し大地の汚れ知らぬげに）

手の平の地から日まわり大空へ 繁 子

（露地裏でひまわり空をこいしがり）

地味な人目立ちもせぬが奥ゆかし 久 子

（ゆかしさがちらほらして道迷い）

地下街をウロウロして道迷い 濁 水

ちよつとも面白くないよ。脳味噌をしばれ。

（地下街でクイズみたいに迷われ）

騰る地価マイハウスなど夢の夢 満津子

（建てる夢尻目に地価がつつ走る）

土地買えど家は建たずに草ぼうぼう 隼 人

説明句はかくの如しと言いたい。

（草どもに貸すため買つたような土地）

地下鉄の出口に迷いなれぬとこ 比呂路

前句同様に説明句の見本だよ。

（地下鉄の出口が迷え迷えと言う）

新墓所国から先祖も迎えて来 三十四

（新墓地へくのにの先祖迎え入れ）

月笑う地には公害でんわんや 藤 持

（公害の地球を月があざ笑う）

空を突き地にもぐり地球の狭き 同

（天を衝き地にもぐり地球狭くする）

地下の駅こほろぎ一家が住みついた 敏

（地下の駅こほろぎ一家へ宿を貸し）

土地売つて農家に過ぎた家を建て 双 葉

（農地売つたらしいでてっかく建てよつた）  
地図出して旅の楽しさ繰り返す 綾 女

(地図追って旅の思い出直し)

地下街で別れ地下街でまた出逢い  
苦笑させるな。この調子だよ。 同

人間の世界だけにあるらしい天地の差  
定年へ地価が気になる社宅族 改孝  
(人間にだけあるらしい天地の差)

千鳥足地面がじっとしてくれず  
体験を語つた。面白いよ。この調子だよ。 英詩  
道がつく噂へ地価がもう動き

億のつく空地で草が威張ってる  
川柳の表現のコツをつかんだらしいぞ。 同  
地下足袋で築いたのれん継がぬと言う

墓地跡は縁起がよいそだモータール建て  
杜月

よき句材を拾い出す努力をされよ。頑張れ。  
地図楽しこんなに近い君の町 西合

つとむ

つとむ

つとむ

つとむ

つとむ

つとむ

つとむ

つとむ

つとむ

地の底をはいずり廻るような恋 同

調子が出て来たようだな。精進あれ。  
地味だった姉の遺児がすでに派手 誓二  
ニューモードお国訛りがまだ抜けず

地に返える椿無気味なほど静か 春海  
地の果てに旅立つように送る母 露杖

ほんのりと色香の匂う地味づくり 同  
灯を消してマダム女の地にかえる 同

雨降って地は固まらずくずれ落ち 同  
売ってから地団駄踏んでる土地ブーム シゲ

この土地に虫花係が養われ まさひろ  
異常潮位陸地にとつき呼吸する 同

真向いへ行くのに地下をくぐられ 肖二  
天然の地形生かしてニュータウン 同

地団駄を踏んでもカラスは白と言う 静子  
土地柄か金が尺度の生きづらさ 潮音

静子

潮音

潮音

潮音

潮音

潮音

潮音

潮音

五句ともに一応出来ている。ご精進あれ。

会社での地位を世間は鶴のみする 保夫  
緑立つ大地羊の群れを呼び 止水

地鳴りする力で平和集めたし 同  
虜囚の昔地平線が知っている 同

土地勘を狂わすように団地建つ カズエ  
地方出と聞けば純情かと思ひ 同

進歩の跡が見えて来たが、もう一と頑張れ。  
地に堕ちた道義明治がくやしがり (名前が落ちてた)

貞祐さん五句送って下さい。たった一句では  
あなたの句風がつかめない。ご健吟あれ。

陽山さん題を間違えたね。地を池と読んだ。

題半十一月二十日締切(新年号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二七一一  
本 田 恵二朗

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

大 萬 川 柳

「捨て石」

入選発表

選者 中島生々庵  
投句総数 五百句  
入選 七十三句

大阪 水 京  
辺境にボツンと駐在所の灯がとも

堺 天 笑

ギブアンドテイク上手に損をする

貝塚 つき子

吉報を抱いて捨て石舞い戻る

堺 一二三

捨て石どころか一目先も読めぬ腕

東大阪 弥 生

まだ手応えがある捨て石で身構

広島 鬼 焼

捨て石の過去をガイドは唄にする

笠岡 遠 二

条件により捨て石になるとする

倉敷 克 枝

跨がれて踏まれて笑う石となり

堺 慶之助

捨て石も出来ない程に追い込まれ

大阪 誓 二

捨て石のつもりで過疎の山護る

東大阪 生 長

捨て石となった自爆の部下に触れ

捨て石を知らず相手は調子づき  
大阪 文 秋

特攻隊捨て石にして国破れ

高槻 静 馬

捨て石のつもりでちよい／＼飲ま

倉敷 筒 子

親分が骨は拾ってやると云う

鳥取 露 杖

中盤戦捨て石一つ効いてくる

鳥取 春 海

捨て石も辞せず明日の策を練る

大阪 新之助

捨て石になる気でにぎる紙テープ

鳥取 無 閑

捨て石のように再婚すすめられ

大阪 保 夫

捨て石のつもり定年まで僅か

倉敷 翁 童

捨て石と知らず深追いたし手き

大阪 滋 雀

捨て石となる無医村にペタル路む

倉敷 千 翁  
捨て石の心を拾わねばならず

米子 瑞 枝

捨て石の限界入院して悟り

米子 千 代

捨て石の重み歴史が語り継ぐ

岡山 葵 丘

捨て石となって遺骨も帰らない

大阪 十止庵

わずかある知性捨て石にはなれず

大阪 双 楽

捨て石のような息子に養なわれ

大田 軒太楼

捨て石の決意社風にメスを入れ

大阪 章 雅

捨て石になる気で移住銅羅を聞き

倉敷 扇 水

捨て石になる気で仲裁乞うて出る

岡山 七面山

捨て石となる運命に生れつき

大阪 一三夫

捨て石になります票を集めます

平和への捨て石火災ピンを投げ

今治 昌 道

捨て石になる気を締めさす別居

捨て石へ故人の偉大さを偲び

倉敷 梁 水

捨て石を甘く見すぎた日の不覚

捨て石の亡夫に会える九段坂

捨て石は後につづくを信じとり

大阪 弘 生

捨て石は没後の知己を求めてず  
大阪 柳 志

捨て石の無駄でなかった祝賀会

捨て石の随所に生きて立志伝

神戸 どんたく

捨て石でしたと定年ばつり云い

捨て石に徹して定年消えて行き

大阪 水 客

捨て石の無駄を若さが口にする

平田 代仕男

捨て石の人生などと思うてず

華やかに生きて捨て石など知らず

捨て石のいつか世に出る日を信じ

愛媛 悠 泉

捨て石となる気の辞表叩きつけ

捨て石の覚悟を妻にとがめられ

岡山 白 水

捨て石の声なき声にはげまれ

捨て石の過去は忘れることにする

呉 英 詩

捨て石は御免ですよと向き直り

捨て石へさすが老獺のつてこず

大和郡山 カズエ

碁盤目の隅で捨て石光ってる

捨て石となる気荒土に挑む鉄

堺 真紗子

合併の人事捨て石らしい椅子

捨て石でいいさと長兄学を捨て

捨て石にされて沖繩復州待ち

捨て石にき氣スパイを買って出る

大阪 阿 茶



大谷 月都

お  
お  
た  
に

# 「雅号ぶっちゃけばなし」(86)

「拜啓、秋も深まりました、母上には御元気で御過しですか。戦いも決戦模様、二十歳を待たず飛行兵に採用され乍ら、未だお召しがありません。勿論日立の皆と此の奈良県警城の疎開先で兵器を造るのも勉強乍ら、既に死を覚悟した身には中天に懸る玲瓏の月を眺め、生も死も超越した自然の摂理を感じて居ります。二十日の誕生日には久し振りで帰阪します。来年も祝って戴けるかどうか、それから潮花先生に契められて川柳を始めました。雅号は毎月の月にあやかり月都とつけました。かたみに良い句をと思つて居ます。栗と大豆を少々持って帰れそうです、ではその折りに。 敬具

昭19・10・10・久能。」

名古屋スレート社長(四十五歳)

## 奇術発表会

御来場歓迎

関西奇術教室

とき 十一月十四日(日)午後一時開演  
ところ 大阪市南区長堀橋筋一丁目二四  
(地下鉄堺筋線長堀橋下車南へ二〇〇米)  
福徳相互銀行本店八階ホール

(錯覚と幻想の祭典)

第四回

捨て石のポスト人間的に練れ 有段の捨て石何か気味わるし	西宮 百酒	捨て石の？りが布石となつて活き 捨て石となつて育てた子に去られ 捨て石のように定年後を残り	佳句	真紗子	捨て石が裏目裏目の負け戦さ	天笑	捨て石の座で祝電を打つゆとり	今治 宵明	反響のない捨て石を無念がり	岡山 白水	捨て石とならねばならぬルージュ引く	笠岡 遠二
捨て石になるを覚悟で飼われとり 人の句	大阪 章雅	捨て石になる程義理があるじやも 地の句	倉敷 扇水	嘲笑われる角度で捨て石耐えても 天の句	岡山 久米雄	捨て石が陽の目に会わぬと朽ち ベストテン (十月現在)	一 真紗子 二 千代 三 花梢 四 文秋 五 天笑	十八〇 堺 十六〇 米子 十六〇 富田林 十五、五大阪 十五、〇 堺	六 どんたく 七 弥生 八 一三夫 九 扇水 十 つき子 十一 一二三 十二 水客 十三 恵二朗 十四 木石 十五 瑞枝 十六 吸江 十七 里風 十八 筒志 十九 柳志 二十 静馬 二一 栄	十四、五 神戸 十四、五 東大阪 十四、五 大阪 十四、〇 倉敷 十四、〇 貝塚 十四、〇 堺 十三、〇 大阪 十二、五 倉敷 十二、五 下関 十二、〇 米子 十一、五 藤井寺 十一、〇 倉敷 十、〇 倉敷 十、〇 大阪 十、〇 高槻 十、〇 大阪	二二 鬼焼 二三 素身郎 二四 宵明 二五 宵明 二六 みのり 二七 章雅 二八 阿茶 第十二回(本年度最終回)	九、五 広島 九、五 倉敷 九、五 大阪 九、五 今治 九、五 愛媛 九、五 大阪 九、〇 大阪

昭和四十七年度第一回  
締切十一月二十日  
初耳  
締切十二月二十日  
投句先  
大阪市南区鰻谷仲之町二〇  
川柳塔社内 大萬川柳係  
(作品は本社へ直接送ってください)

# 柳 界 展 望

あちらからこちらから  
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼川柳塔社同人総会は別項発表の通り、多数の参加を得て十月三日(日)午後三時から御堂会館で開催、予定の審議に続き路郎賞・川柳塔賞の授賞式が行なわれた。

▼岡山県芸術祭第六回岡山県文学選奨が募集になつて

いる。九月三十日にすでに締切られ発表は十二月一日(祝賀川柳大会は九月五日(日)午前十時から宿米市中中央公民館で開催。寄せ書深謝。又、盛会の竹原の近県柳柳大会、東伯町の山陰川柳大会からも寄せ書拝受。

▼第十回金伯川柳大会に出席された藤村涼子さんから

はるばると珍らしい寄せ書を頂戴した。のびのびとした筆跡の柳人諸氏に南米大陸を偲びました。深謝。  
▼富士野鞍馬喜寿祝賀会は昭和四十七年二月十三日(

日)午後二時から東京明石町の治作で開催。兼題、温室・藤島茶六選、女友達、小谷源氏選、喜び・富士野鞍馬選、出席者は一月三十一日までに東京杉並区南荻窪二の二四の十一東京番傘川柳社宛申し込むこと。

▼原仙氏(出雲市同人)金婚祝賀句会は十月十七日出雲駅前タイヘイ旅館で。三戸川柳吟社四十五周年川柳大会は十一月七日(日)午前十時から三戸町中央公民館ホールで開催。

▼田中明二・市川鱈魚両氏の選題記念に特別課題吟が募集されている。魅力・市川鱈魚選、夫婦・田中明二選、各題三句、投句は原稿用紙半載に各題別に明記して、百円封入の上、岐阜市本郷町六丁目井川紋弥方、係岐卓川柳社「特別課題」係

締切りは十二月十五日。

▼椎内市文化協会十周年記念市民文化祭協賛川柳大会は十月十七日(日)正午から椎内市丸調会館で開催。

▼函館市北上市仙台市三戸町誌上川柳競吟会が四地区の女性作家により競われ、昭和四十七年度の誌上を飾ることにした。

▼第十八回北陸川柳大会は十一月七日(日)正午から金沢市本多町大通り石川郷友会館で開催。兼題、天皇・木村喜見城選、鳥・森下冬青選、活気・伊藤藤弘選、地下街・山田良行選、入選・高木鈴の家選、夫人・奥美風露選、信じる・立開柳吉選、来年・森田白林選各一句、投句は百円(切手可)封入の上十一月三日までに金沢市笠町二の十一荒木友路宛。

▼中田新聞新社屋落成記念第二十八回中部地区川柳大会は十一月十四日午前十時から中田新聞新社屋大ホールで開催。兼題、食欲・秋の女・落成・響く・躍進・秋映える・こぼれる、他に雅題(伊志田孝三郎選)、各二句、投句は二百円封入して十一月十一日までに名古屋市中区西区西三の六加藤一星宛。

▼川柳えんぴつは創刊二百号を記念して誌上川柳大会と記念川柳大会(十二月十二日於高岡市)を開催。



新芯気鋭

いつでも細く書ける硬質サインペン

黒・赤・青  
1本50円

ライオン  
ジェットペン

福井商事株式会社

▼柏葉みよの選題記念川柳大会(むつ市)は十月三日(日)田名部神社で開催。

▼岡崎市民芸術祭参加秋の市民川柳大会は十一月七日(日)正午から勤労会館で開催。兼題、結ぶ・灯・読む・無口・風、各題三句、投句は百円封入の上十一月五日までに岡崎市大平町西大森五八の一會田規世児宛。

▼かがみ川柳十二月例会は二日夜池田古心居で。兼題は敬老の日、ご子息らのプ

▼故河相すゝむ三年祭は九月十九日實地公園の墓前で遺族、柳友集い営まれ。窪田久美子・室田千尋・鳥本泰・小浜秋人・本城弦月・吉本青風と薫風が参加した。

▼三光川柳会(岡山市)の芽は第百八十一回川柳忌句集を九月二十三日に発行、川柳忌誌上句会が小幡里風・谷井扇水・野田素翁・逸浜田久米雄・水粉千翁・逸見灯竿の諸氏が選をして、七十名の参加者。

▼西尾栗氏(八尾市同人)は敬老の日、ご子息らのプ



# 新同人紹介

能登原白水

惠二朗・生々庵推薦

レゼントで一週間北海道の旅を楽しまれ、一カ月早い北の国の紅葉を鑑賞、定山溪、層雲、ウトロ、摩周湖と泊りを重ね十九日には弟子屈でくつろがれた。「錦繡」のその名も神居古潭かな」と句性を寄せられた。

▼白百合川柳会(岡山県)九月例会は九月十八日邑久町公民館で開催。

▼林蒼蛇楼氏(ホノルル市同人)は寺院の要務を帯び馬哇島へ約一カ月の予定で出張された。

▼笠原吸江氏(藤井寺市同人)は来春卒業の高校生求人のための学校訪問に宮崎鹿児島二県へ出張。九月九日日南市から旅便りを戴く。

▼中島小石さん(大阪市同人)は十月二十四日(日)正午から毎日ホテルで開演の小川流舞踊公演に出演、「しずのおだまき」を舞われた。

▼越智一水氏(今治市同人)は九月二十六日青森八甲荘で開催された第十三回全国郵政川柳大会へ出席、わざわざ会場を訪問された工藤甲吉氏と歓談、同夜は大町桂月で名高い蕨温泉に一泊された。「紅葉(湖酔うた色となり)」

▼林夢虹氏(豊中市同人)は九月二十五日大台ヶ原へ登山雄大な景観を楽しまれた。「花二つ付けてりんどう君とぼく」

▼尼崎市文芸祭・川柳会は十一月二十一日(日)中央公民館で開催。

▼第二十二回西宮文化祭川柳大会は十一月七日(日)午後一時から西宮市民会館で開催。兼題、歴史・紹介・射る・快心。講演「川柳と西宮」中村東角氏。各題三句、投句は十一月五日までに西宮市前浜町三の二七福島郁三宛。

▼西出一栄さん(大阪市同人)は十月十日の六十九回目の誕生日に、句集「ねっくれす」を発行。

▼山田季賛氏(高槻市同人)は九月十三日木曾御岳山へ登山、頂上は快晴だった由。

▼長谷川三司氏(尼崎市同人)は右耳上の小さなコブを切開手術で入院されていたがこのほど退院。

▼河内天笑氏(堺市同人)の嚴父栄三郎は七十四歳で九月二十二日夭寿を全うされた。告別式には菊沢小松園氏ほか本社同人が参列。内藤きさ子さん(岸和田市同人)十月十五日の民謡大会のため大忙し。早く川柳へ本腰を入れる日等待っておられる。

▼菊田いさむ氏(京都市同人)の嚴父浅治郎氏は九月十八日急性心臓代償不全のため死去、行年七十五才。葬儀は九月二十日自宅で営まれた。謹悼。

▼石丸弥平著現代川柳漫画集「ごだやら人生」は昭和

四十六年九月東京都千代田区麹町四の八蒼海出版社から発行になった。川柳塔の柳人の句の抄を、ここでも生前の清水白柳氏が担当されたので感慨深いものを覚えるのである。「俺に似よおれに似るなと子を意味路郎」「飲んで欲しいやめいも欲しい酒をつぎ葎乃」「パンの耳好きなものもいる子沢山春果」などなつかしい句が掲載されている。定価七百円。本社でお取次きします。

▼南海川柳会十一月十八

日午後六時一題・自動踏切・むりやり・市場籠。会場は南海電鉄本社食堂。

▼大阪川柳会十一月二十日午後六時一題・下っ端・削る・珠数・にがい。会場は松崎三丁目以和貴荘。

▼東大阪市川柳同好会十一月二十七日午後六時一題・鉄永駅前、中央公民館第二集會室一題・風・初対面・笑う・紙・席題二題(各三句以内)会費百円、投句だけは十五円切手四枚、先東大下小阪七の十一、竹中尚二宛。

賛助  
大矢十郎  
会員



## 金露

灘を支える  
味の味

清酒

# キンロ

金露酒造株式会社

# 46年度二賞発表句会と

## 同人総会

10月3日 御 堂 会 館

七月の路郎忌川柳大会と同じ御堂会館の文化教室で、本年度の二賞発表句会と同人総会が開かれた。会場正面に式次第のほり紙がある。それには、

司 会 (栞氏の名調に会が進行する)

開会の辞

議長選出 (生々庵主幹が、今日「川柳塔」のあるのは故路郎先生と同人諸氏のご協力によるものと感謝の意を示めされた。)

経過報告 (薫風氏が、路郎忌川柳大会、白柳氏の急逝、それによる新役員の就任。句集刊行も「清水白柳遺句集」万の、杜的氏の「的」、栞氏の「水鶏笛」が注目を浴びた。各地川柳大会へは主幹以下出席して親睦をはかるなど近來にない動きを見せた。)

会計報告 (多久志氏はこまかい数字を読みあげ、川柳塔の健在を報告された。)

役員改選 (生々庵主幹が別項「63P」のように新役員の名をあげ承認をもとめられると異議なしの声から賛成の拍手にかわる)

質疑応答 (パッジ、同人増加など質問があった。)

閉会の辞 (小松園氏)

四時半に総会が波静かにおわり、会場内の食堂へ、それぞれ夕食をとりに出て行く。五時半にはお目あての二賞発表句会の幕あきた。

路郎賞の尼緑之助氏が出雲から、川柳塔賞の生信笑子さんが山内静水氏に付き添われ竹原からはるばるのご出席である。

受賞者には、桶と賞状と生々庵主幹の色紙が主幹の手から授与されると拍手の嵐が起る。おめでどう。

月間賞は香川酔々氏にかがやいた。おめでどう。(句会の司会は鬼遊氏、わきとりは天笑氏、写真は新之助氏)

(河井庸佑整理)

出席―新之助・生々庵・葵水・与呂志・栞・一三夫・滋雀・酔々・一治・古方・十郎・多久志・天笑・庸佑・静歩・鬼遊・柳志・万の・文秋・百酒・太茂津・小松園・静水・笑子・野迷路・メ女・静馬・摩太郎・春果・弘生・緑之助・薫風・双楽・竹莊・葛城・操子・幸代・狂二・一舟・美房・喜風・維久子・

つき子・花梢・凡吉・明陽軒・宣介・雀踊子・肖二・綾女・あいき・君子・形水・美佐子・儀一・恵美子・牧人・雪二・吸江・一二三・季賛・葉子。

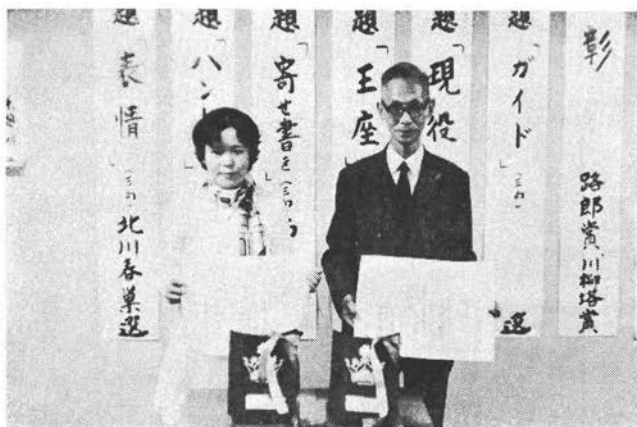
席題「ガイド」

橋高薫風選

ガイド役一夜漬けとは思われずつき子居眠りの強制もしてバスガイド雲がなければの説明もガイドするそのうちにいうやる思たらずガイドガイドして明日の夢をまき散らす又の日を約し別れるバスガイド旅日記ガイドの善意書きとめる子の嫁に値踏みもされているガイド別嬪のガイドにバスは素直なり日本語も混ぜてガイドの如才なし表情もいれてガイドのコンクール光堂テープにガイドして貰うバスガイド左と右が違うなり旗持ったガイドへつづく戎橋ローカルの売娘ガイドもしてくれて種切れになってガイドは唄にする市長さん御みずからのガイド振り景色どころかガイドの顔にまだ見とるガイドの名おぼえて降タリミナルガイドの指先、この虎になつているガイドさえ知らぬ穴場をよく調べ觀光地ガイドの笛の中に入る伊豆の旅ガイドお吉に早変わりマイク手に握ればガイド標準語長距離をうまいガイドに乗り合われ

つき子 弘生 春果 古方 静歩 操子 花梢 十郎 百酒 多志 肖二 笑子 竹莊 静水 吸江 天笑 与呂志 竹莊 天笑 花笑 狂二 葛城

わく詩想ガイドの歌にこわされる 一三夫  
手袋の白さをガイドおしみなく 生々庵  
ガイドから聞いた知識を言いふらす 葵 水  
ガイドが唄ううたに合せて凡夫婦 惠美子  
だらしない客のお守りもするガイド 一三夫  
喋るだけ喋らせガイドほっとかれ 太茂津



路郎賞 尼 緑之助氏  
川柳塔賞 生 信 笑 子 さん

高野山ガイドの声も澄み通り 維久子  
美人ガイド都大路が蘇えり 小松園  
バスガイド古典文学地理歴史 柳 志  
頼まれて頼んでガイドさん多忙 笑 子  
ガイドが指す空が汚れて哀しくなる 惠美子  
故郷を思うガイドこの歌唄うとき 薫 風

席題「現役」

山内静水選

現役を退いても口喧しいおやじ 静 馬  
現役は今日も超勤するのらし 古 方  
現役を離れ親子の水入らず 天 笑  
現役のパワー信じて去る社長 一三夫  
若い現役に囁託いたわられ 宣 介  
現役の頃から貯める手を覚え 生々庵  
現役の肩去るひとにたたかれる 惠美子  
現役の強さは明日へつなぐ夢 弘 生  
現役のばりばりですと人が言う 柴 榮  
現役の知らぬ苦労を知る二浪 庸 佑  
現役の若さへOB眉を寄せ 鬼 遊  
現役の若さへOB眉を寄せ 鬼 遊  
現役の自信皮肉も言わせとき 滋 雀  
勇退が忍者のように天下り 与 呂 志  
現役の威力しめじみ退いて知り 柳 志  
さつさとお帰りの現役やおまへん 百 酒  
現役の内にと娘嫁づける 古 方  
憎くまれて去る現役に悔いが無い 多 久 志  
現役を退いて自前で振るクラブ 滋 雀  
現役を相手に大鵬胸を借し 柳 志  
停退が迫り現役ドラマめき 一三夫  
現役を退いて解る人になり 生々庵  
馬鹿正直のまま現役を押し出され 百 酒  
生々庵

現役羨やまず焚くほどはもつてくる 古 方  
現役としての生き甲斐しみじみと 多 久 志  
朝の改札まだ現役の足で出る 万 的  
現役を去る日土俵を振り向かず 葵 水  
片腕と言われ現役復帰する 花 梢  
現役を情性のままできた鎖り 竹 梢  
現役でいえないことを言つてやめ 静 馬  
ヤングパワー現役を脅かし 滋 雀  
D51のつばめを引いたままの艶 天 笑  
現役を離れてからの父ちゃん 静 馬  
現役に隠居が戻るドルシヨック 天 笑  
現役としてベンチから見てるだけ 文 秋  
現役を飽かず休まず仕事せず 静 歩  
判決してまだ現役という誇り 春 果  
現役のバリバリ童顔持つて 惠美子  
せめてもの誇り勇退したつめる 静 水

兼題「王座」

尼 緑之助選

周囲みな敵と王座について知る 十 止 庵  
王座からひきずり下す鞭に耐え 扇 水  
ころげまいとする王座死角が見え つき子  
欲のない顔でカップを差し上げる 天 笑  
王座なおゆずらず馬場のチヨップ飛 操 子  
王座にも泣き所あり一人ばち 滋 雀  
栄光の王座は迫られるものと知り 扇 水  
王の座に坐ればみんな敵に見え 文 秋  
友情は別タイトルは渡されず 柳 志  
反主流明日の王座へひしめいて 静 歩  
蔭口が積み重なっている王座 葵 水  
ライバルに王座譲った夜の安堵 太茂津

寄せ書きはみんな楽しく酔っている  
春 壘  
過去を持つ女 寄せ書き細々と  
静 歩  
寄せ書きに個性が見えぬボールペン  
葉 一  
寄せ書きに踏倒された名を見付け  
十 郎  
アリバイになる寄せ書きとあとで知  
小松園  
寄せ書きは大陸時代からの仲  
明陽軒  
寄せ書きに天才詩人の右下り  
万 的  
ボスとして書く寄せ書きの位置があり  
万 的  
寄せ書きはじゃこ寝のよき名を連ね  
葛 城  
寄せ書きは横書きたて書き斜書き  
兼 兼  
兼題「ハンドル」 若本多久志選

ハンドルの疲れへ人形揺れてみせ  
軒太楼  
ハンドルへ母の祈りもしがみつ  
千 代  
生きてゆくハンドルにもある信号機  
一 治  
逆境のハンドルしかとにぎりしめ  
つき子  
ブレイキのきかぬハンドル持つ生活  
君 子  
教習所のようにハンドル動かない  
形 水  
自信ない ハンドル女乗せたがり  
儀 一  
ハンドルはホットパンツの娘がに  
メ 女  
ハンドルを持つ身お神酒は形だけ  
一 二  
子が出来てからのハンドル恐くなり  
幸 代  
ハンドルを握ればわいて出る力  
操 子  
ハンドルの主失語症はどの言わず  
百 酒  
ハンドルの交替は居ず七曲り  
喜 風  
お守りを信じ ハンドル良く動き  
静 水  
指さしもするハンドルを信じ切り  
野 路  
ハンドルを切ったとこまで覚えてる  
ハンドルはここから中仙道と家並  
柴 二

ハンドルを片手に女軽く抱く  
肖 二

若本多久志選

ハンドルはまだ頼りない 免許証 形水  
 逢いにゆく 口笛 ハンドルが軽い 鬼遊  
 ハンドルを黙って握るたのもしき 一三夫  
 父ちゃんのハンドル信じて子は眠り 葛城  
 ハンドルへ念仏の出る つづれ坂 美房  
 ハンドルを持つのでジュースが出る 牧人  
 下請けの妻も ハンドル 回してる 章雅  
 D51のハンドル光ったまま廃車 柳志  
 マイペースで行くハンドルを追いかける 明陽軒  
 ハンドルを持つ年配へほととずる 太茂津  
 ハンドルを捨てて人間とり どんたく  
 ハンドルに口笛が出る 空の青 十止庵  
 ハンドルへいのちを守る汗がうき 静歩  
 ハンドルを止めて 芒の風を聞く 牧人  
 ハンドルをくるり等外ころげ出る 君子  
 ハンドルを持つ身に絶景うらめしい 牧人  
 ハンドルを一家支える 手で握り 春果  
 煙草も買わずハンドルは道を訊き 響二  
 試走車のハンドル握る背に切り火 滋雀  
 ハンドルを握るしぐさで猪口を逃げ 鬼遊  
 ハンドルへ男を賭けるゴング鳴る 恵美子  
 靜うて出たハンドルを思う 雨 多久志  
 お見合々ハンドルもてることも言い

兼題「表情」

北川春巢選

表情を殺し合いつつ 調室 薫風  
 裏服着た代理の至極無表情 敏  
 ウレシイお顔させてカメラの無表情 葵水  
 オバーな表情をするガラス越し 栗  
 誘惑をする表情は別に持ち 葛城  
 平手がきこえる表情になつてきた 新之助  
 日本の表情ドルにうろたえる 一三夫  
 ギョツとした表情刑事見逃さず 文秋  
 能面に似た表情を持ち歩く 新之助  
 ノーコメント表情固いまま終わり 新之助  
 表情もかえぬ女の嘘を聞き 摩太郎  
 表情はもう許してもよい微笑 多志  
 生活の疲れがさせる無表情 花稍  
 無表情が精一っぱいのレジスタンス 宣介  
 表情も豊かアメリカ帰りなり 一二三  
 表情が小さな泡になつた蟹 雀踊子  
 表情に気付き話題を急に変え 章雅  
 金の要る話しに父は無表情 久司  
 母と娘の会話へ父の無表情 久司  
 表情の冷い女にした整形 形水  
 表情はみんな覚えたコンパクト 久司  
 心経一巻本尊のお顔ちごて見え 古方  
 表情の豊かな人で疲れ切り 幸代  
 産院へ見舞う表情整える 十郎  
 対話の表情すでに負けている 吸江  
 定年の表情たつぷり墨をする 静歩  
 豊年の表情おかめ鈴を振る 静歩  
 苦しんだ表情でなしデスマスク 春果

▼路郎忌句会兼題「七」GMP七つの海を舞  
 台としー野迷路。

川柳塔社常任理事会

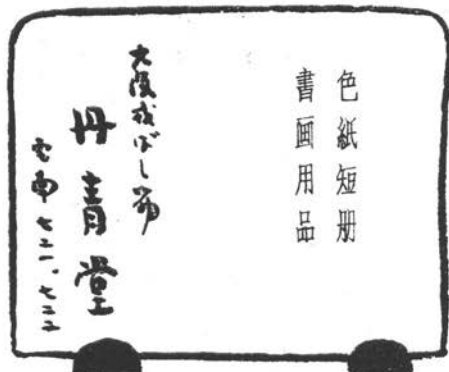
十月二日が常任理事会だった。いつもは四日なので忘れた人が多かったようだ。

集まる人は、古方、庸佑、多久志、柳志、生々庵、薫風、小松園、いさむ、一三夫諸氏が、あすに迫った二賞発表句会や同人総会などについて協議する。

前号にも書いたように、生々庵主幹は公私共に多忙である。それがために副主幹二氏、副理事長五氏ということになった。川柳塔も大世帯になった。

川村好郎氏の戦列復帰で、いよいよ活気をよび、川柳塔に進軍ラッパが鳴る。

—七時半閉会—







▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

### 南大阪川柳会

金井文秋報

みる阿呆踊る阿呆へ撮る阿呆 滋雀  
ボロボロの過去引きずって来た時 弥栄子  
過去のある女涙を流さない 形水  
派手に着て若さにすがりつく女 君子  
あわてて原因マイペース狂いだし 千梢  
阿呆ならこそ誰もようせんことをす 古方  
マイペースのままですんなり事がま 好一  
香典のそろばん何べんも何べんも 静歩  
アホになる握手に野心秘めている 美代  
老夫婦もうちぐはぐになった過去 花梢  
本物の阿呆になりたい 金詰まり 水京  
抜目ない男の過去に残る悔 柳宏子  
過去悲しジャガタラ文の墨のいろ 酔々  
阿呆らしい戦果を朝の膳に乗せ 葵水  
恋捨てた日から狂うたマイペース 小路  
現在のきみが好きだよ過去は過去 圭井堂  
阿呆三人よれば女と酒の事 あいき  
そろばんを鳴らし商談すんだらし 綾女  
そろばんが真つぐ隅にある休み 新之助  
更衣室からGパンに交つてた 文秋

よしよしとそろばんずくの手を握る 誓二  
結納へそろばんいれる母の顔 金三  
マイペースそれで全身焦ってる 一治  
限界に派手な喧嘩をして晴らす 凡吉  
仲人へ打ち明けかねる過去をもち 柳志  
つまずけばすぐ思い出す暗い過去 静舟  
合計が合わずそろばん叩かれる 静香  
阿呆にはなれぬ強気をもてあます 喜風  
二日酔胸にうっとり阿呆な金 儀一  
そろばんを片手へ誘う電話来る 悟郎  
Gパンの妻に おんなをふと忘れ 一二三  
母と娘一とケタ違っていたそろばん 頂留子  
好調に手綱を絞るマイペース 静馬  
アルバムヘドラマのような過去浮 一栄  
年と共に父に似て来たマイペース 章雄  
堺・若芽合同句会(堺市) 和花草春報  
星見せる一泊も組む夏休み 茂美  
ひたむきな星のニユーフェース 静馬  
星近し出稼ぎの父肩車 耕人  
星見える声へ病人むきをかえ 徳子  
国境の星を南北から分ち 筑前  
スモッグへ火星かすかに光る夜 草春  
星一つ一つ数えかすかに光る夜 信天翁  
借りもの私レモンが浮いている 夢成  
輪の中でビエロになっていた私 つき子  
上司から小声で私用云いつかり 金三  
私から見れば男は皆阿呆 儀一  
私だけそれでもいいの彼が好き 誓二  
拡げても私なりの視野であり 美代  
能面の裏で私が泣いていた 笑痴  
故郷の土と別れて描く夢 青香

### 第23回大阪文化祭川柳大会

日時 昭和46年11月21日(日) 11時

開場・12時半開会

会場 中央公会堂(3階小集会室)

講演 大阪市立天王寺動物園長

兼題 「自転車」 和田 辰巳氏

「名簿」 岡橋 宣介選

「近頃の社会記事から」 平井与三郎選

「領土」 広瀬 反省選

「根性」 堀口 塊人選

当日2題発表(12時締切)

各題ごとにハガキ1枚に2句ず

つ・住所・氏名・雅号明記・郵送

11月10日着限

締切 30北区中之島1 大阪市教育委

宛先 員会内 大阪文化祭川柳大会係

賞 席題・兼題とも秀句に府知事・

大阪市長・府市教育委員長から

「川柳賞」選者から「選者賞」

を贈呈。

主 入選句集希望者は200円別送

句集 大阪府・大阪市・大阪府教育委

主催 員会・大阪市教育委員会

清涼 左久良 宏子 千万子 双葉 柳信 弥栄子 一舟 天笑 摩太郎 維久子 百水 一二三 花梢 たつお 葵水 輝和 遊仙 小松園 カロ女 峯円 公女 快夢起 雪女 蒼蛇樓 紅溪 万里歩 暁舟 柳子郎 河舟

— 61 —

川柳わかやま

垂井養水報

好奇心また来た道へ戻らせる 佳宵  
お茶持て姉の見合いへ好奇心 ふみよ  
好奇心見てならぬもの見てしまひ 司  
カタカナの母のひと筆胸を衝く 峻  
水茎の跡うるわしく病んでゐる 弘生  
弘法もその日の都合筆を選る 佐一郎  
もてあますひまに浮んだ好奇心 まさお  
幸運の筆はダルマの目を入る 照代  
律気もの斜めのものが気に入らず 安代  
好奇心足跡だけの雪男 竜  
好奇心負けじと犬も貌を出す 醉々  
斜めからまだ叱っている視線 保夫  
テレビ見る妻は斜めの位置が好き 十郎  
断崖の斜めの松でよく撮られ 栄  
斜めから世間見つめる 齡となり 智  
代筆ですませておけぬラブレター 延伊知  
わが思い伝えてくれる筆の先 福松  
筆跡が似る似てくるとたがわれ 裕美  
この人はいつも斜めをむく写真 裕美  
天引きが多く女房キゲン斜めなり 春亭  
大輪のタリヤ斜めになって咲き 一郎  
火花が斜めにとんで子に泣かれ 里美  
人数がふえてかまばこはすに切り 隼人  
はす切りのごちそう並ぶ幕の内 おせい  
梅雨明いて日本人は筆をとり 秀子  
正座して日本人は筆をとり 太茂津  
好奇心だけが親をあわてさせ 一光  
蚊をたたく音も聞えてくる受話器 陽一  
ちよっと斜視なりの色気があれて 千寿子  
長電話 かんじんのこと言い忘れ 延子

校正の朱筆も迷うかなづかい

葵水

川柳たけはら

森井藩居報

世話好きが寝ていて事がはかどらず 季  
留年の親の欲目が崩れだし 扇水  
立葵のぞみ一途にもえさかり 酉  
許せない人あり夫の写真帳 郷愁  
長生きをせよと他人にいたわれ 大陸  
もがいてる虫の命を見てた僕 日出夫  
参観日女となつてたたくパフ 英子  
忙中閑あり一人旅をゆく 春子  
間をおいて見る妻母の仕草なり 英子  
み仏のお慈悲にすがり病みつづけ 雅鳳  
新婚の味つかの間にママとなり かつ子  
追い抜いてから気苦労がつきまとい 舊居  
かといつて医者のお世話になる弱味 そのみ  
朝顔の伸びが気になる子の日記 鬼焼  
生き甲斐は働いて飲むコップ酒 貞子  
雨しとどバラにも傘をさしてやり 五湖  
タリヤ咲く亡父の齢にあと四年 妙子  
ゾカスター温室育ちを思い知り 政己  
日曜百姓へキウリが太りすぎ 不動  
評議員どれも結果でものを言い 不朽  
路郎という詩人のありき雲の峰 千百合  
七夕をかざす神の子仏の子 春昇  
健康で飲む養命酒のものたらす 笑子  
早いことしゃべれとバスが待つて 静美  
待つ自信こんなにも明るい日を 凡女  
ブドウ酒は母へとくれたみやげ物 路秋  
勘定は男にまかすコンパクト 操子  
しみついた心の垢へギョツとする

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 661 三四五二一四

夜間 661 四四〇八

待っていたように電話へ出てくれる 蘭幸

いつまでも受話器に残る 京詠 房子

御堂筋静まりかえり 恩師の忌 静水

花ざくろもうすぐ夏の陽へはげみ 紫苑莊

エピソード残して人生幕を閉じ 天石庵

甘口の酒にうっかり女酔い 泉

川柳たけはら 森井藩居報

喧嘩して喧嘩して兄弟あとなが 季賛

本当に困っていないからしゃべり 扇水

ローカルの駅のセンスで花が咲き 操子

地獄からかえり達者に飯を喰い 迷仏

ご自慢のコーヒー嫌いですと言ふ 五湖

分譲の土地スマートな名で呼ばれ 清太郎

プロポーズあつて親子とも 安堵 郷愁

あるだけの指輪おんなの見栄が嵌め 聖学

苦しみにはりてをみつて生きるさ 西合





川柳塔社同人総参加ノ（一人二句以内）

# 新年号を飾る「ユーモア特集」

（十一月二十五日着便）

川柳に忘れられているものはユーモアである。そのユーモア味のある川柳で新年号を飾っていただきたいのです。

## 年賀広告受付！

本誌五分の一段が千円です。グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・十一月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が二百円

川柳塔社

振替口座大阪  
三三三六八番

## 新年号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選

近作柳構（10句）川村好郎選

課題吟（各題5句以内）

「自転車」出原敬一選

「孝行」横山一声選

「マナー」西森花村選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

## 本社十一月句会

日時 十一月六日（土）午後六時  
会場 以和貴荘（いわきそう）

阿倍野区松崎町二丁目  
電話622・1275番

兼題

柳話  
「横文字」  
「無芸」  
「ボウラー」  
「正論」

席題  
三題（題と選者は当日発表）各題三句以内厳守  
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

吉田圭井堂  
金井文秋選  
傍島静馬選  
正本水客選  
菊沢小松園選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

12月の兼題「家元」「サイレン」「帰省」「駐車場」

## 二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選

近作柳構（10句）川村好郎選

課題吟（各題5句以内）

「非常ベル」辻圭水選

「赤字」石坂新雪選

「産院」石川侃流洞選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

## バッジの図案締切迫る

定価 百八十円（送料十六円）

半年分 千七百七十円（送料巻）

一年分 二千二百円（送料巻）

昭和四十六年十一月二十五日印刷  
昭和四十六年十一月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼発行人 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一・三九八五番  
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★本年度の総会も二賞もすんでホッとした。その前夜が常任理事会だった。

ボクと庸佑があと片づけをしていておそくなったのが幸運で、生々庵主幹から心斎橋のオリビアで夕食をご馳走になった。

「ここ二、三日、ご機嫌が悪かったね」と医博のおみたてはこわい。

★25日の送金予定が30日になったため、イライラしていたから、コトバツきも荒れていたのかも知

疲労・肩こり・神経痛に

**アリナミンA**

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ  
☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。



59

れない。本号も十月十日に編集が完了したので25日ごろに送本できるはずだが、これも受けとるまでわからない。

★うちで印刷業をしていた頃、ボクのおヤジは謝やまることが平気で約束違反の常習者だった。が、

謝やまることがキライだから、けつよくボクの代で店がつぶれたのだろ

う。商人やサラリーマンではメシが食えないということらしい。

★すしし旧聞になるが、路郎・葎乃先生の愛嬢で、元川柳雑誌の編集長だった西村梨里さんが「敬老の日」に毎日テレビへ出られた。

▼洋服、和装の時は、それぞれ歩くき方も違うように、色や柄によってもシグサが変わるのは女性だけでしょうか。

▼私はストラックスをはくとガゼンおちゃめになります。おかしなませんです、服装によって女性の気持ちが変わるなんて。  
―菓子

★いつものようにテレビをつけながら机に向ってると、司会者の森乃福郎が「西村梨里さん」と云う。ひよいと横を見ると、多くの主婦たちに囲まれて梨里さんがうつっている。

★敬老の日の特集らしかった。梨里さんはお寺さんにかたづいておられるが、老人と若い人の断絶のカベをとり除くため、

姑と嫁の話しあう会を作られたようだった。

★その主旨などを梨里さんにしゃべってもらう設定になっていたようだが、放送というものは、持ち

時間が一、二分よりないので、前置きが長いと、要領を得ないまま、つぎのコーナーへ行ってしま

う。  
★放送というものは、時間にはスゴク冷酷でトントン番組を進めていくーだいたい原稿用紙一枚が一分間ということになっているが、口が商売の人なら一枚半は軽い。アナウンサーは一秒間に五音発声すると聞いて驚いたことがある。

★自作の原稿で一分間ずつ六日間、ラジオでしゃべったことがあるが、わずかに六枚の原稿を二、三回休憩して水を飲んだ。(シロウト臭いところが良かったとヘンなホメ方をしてもらって冷や汗をかいた)

★ちやうどこの録音のあった日、ほかのテレビ局に出ているのだが、ラジオのほうから、早く出てこいという電話が鳴りずめだった。うちのオバハン

のやつ、ウロウロしてしまつて、「もうそちらへ着くつもりですが……」と謝やまっている目の前のテレビに、ボクが出ていたそうで、「あんなウソは二度とイヤや」

★テレビの威力は大きい―故沢田四郎作先生(民俗学の大家)から、はじめて電話をいただいた。

「テレビうつりは男前」とのことだった。

★テレビの番組を見ると世の流行がすぐわかる。川柳人見るべしだ。

★年賀広告またよろしくお願いいたします。  
(不二田一三夫)

純良医薬

第一製薬

うちみ・肩こりに

べタンと貼るだけ!

〈新型バップ剤〉

**パテックス**



● 140mm × 100mm Ⅱ 3枚入

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十六年十月二十五日 印刷  
昭和四十六年十一月一日發行 (毎月一日發行)  
創刊大正十三年 通卷五三四号

川柳塔 十一月号

◆大阪なんば ホテル 南海

南海電鉄



うまい酒

清酒

菊正宗

定価 百八十円 (送料十六円)